中部大学　工学部　都市建設工学科

2022 年度卒業研究論文概要

ジブリパーク開園による大芝生広場の使われ方に関する研究
～開園前と比較して～

EC18076　山田　琉士

1.研究の背景と目的

2022 年 11 月 1 日、愛知県長久手市で開催された愛・地球博の跡地であるモリコロパークの敷地に 3 つのジブリパークのエリアが開園した。ジブリというビッグネームから観光地として全国から多くの人が来るようになると考えられる。経済効果は総事業費約 340 億円に対し年間 180 万人の来場者と 480 億円と試算されている。しかし、たくさんの人が来園することにより今まで利用していた場所がジブリパーク開園以前のように利用できなくなり公園の在り方が変化してしまう可能性がある。そこでジブリパーク開園前後で公園滞在者の居場所や行動を調査して今までのように利用できているか調査し明らかにする。また公園滞在者の変化に合わせて大芝生広場の魅力を向上させるための方向性を探ることを本研究の目的とする。

2.研究の枠組み

2.1.対象地域の概要

本研究では、愛知県長久手市に位置する「愛・地球博記念公園」の大芝生広場を研究対象とする。大芝生広場は 11 月に開園するジブリパークの 2 つエリアに隣接しており、滞在者の変化が大きいと考えられる。大芝生広場は写真のようになっており、A・Bの人工芝生とC・Dの天然芝生の 2 種類があり、C・Dの天然芝生の方は傾斜がある。B の芝生エリアには屋根付きステージもありイベントの時利用される。また公園のイベント担当者はジブリパークが開園することにより芝生エリアを利用するイベントが毎週ある予定であるという話が聞けた。

図１　愛・地球博記念公園マップ

写真１ 大芝生広場

2.2.研究方法

本研究では芝生広場のジブリパーク開園前後での利用者実態を比較するために開園前と開園後で広場の行動観察調査を行う。行動観察調査は週 2 回平日と休日に 10 時 00 分から 17 時 00 分まで行った。1 時間おきに広場の様子を動画または写真で記録する。記録したデータから人数・行動内容・位置に着目して開園前後で比較し利用実態の変化を分析する。開園後の休日は広場 B がイベントに利用されていたので開園後の休日のデータは広場 B を観察対象外とする。また本研究では行動内容を調査する際「運動」「ご飯・休憩」「戯れ（子どもが遊んでいること）」「その他」に分類する。

3.調査結果

3.1.利用者数（平日）

開園前は 10 時の利用者はいなかったが 10 月の内覧会が始まってから利用する人が出てきた。一方で 12 月になると 15 時以降の利用者がいなくなった。開園後は利用者が増加していて、特に 11 時から 13 時までの利用者の増化していることが分かる。それ以外の時間の利用者数に大きな変化は見られなかった。この理由としては特定の時間に愛知県の保育園、幼稚園、小学校が団体で利用するようになったからとだと考えられる。

表 1 広場の利用者数（平日）

	日付	平均気温	合計人数	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時
開園前	9/1(木)	26	52	0	0	4	0	14	13	13	8
	9/15(木)	24	12	0	2	2	0	2	0	4	2
	9/29(木)	21	20	0	2	0	1	7	6	2	2
内覧会	10/6(木)	19.7	47	15	3	11	8	2		6	2
	10/13(木)	18.3	34	4	4	4	3	11	2	6	0
	10/20(木)	14.5	118	7	16	14	20	24	15	8	14
開園後	12/7(水)	7.3	312	2	5	245	9	15	13	15	8
	12/14(水)	6	164	3	71	53	26	11	0	0	0
	12/21(水)	5.2	333	2	92	93	135	11	0	0	0

3.2.行動内容(平日)

10 月になると内覧会が始まり「戯れ」と「その他」の割合が 9 月にくらべ増加、開園に合わせたイベント関係者が下見に来る人が多く「その他」の割合も多くなった。開園後の図 3 では図 2 の 10 月より「戯れ」の割合が高くなったことが分かる。要因としてジブリパーク開園により子供の利用者が増加したことが考えられる。

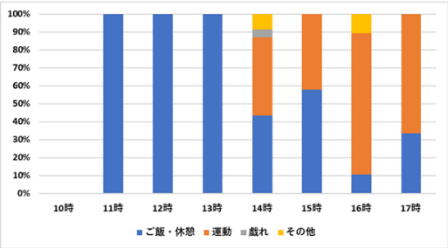


図２ 開園前行動（平日）

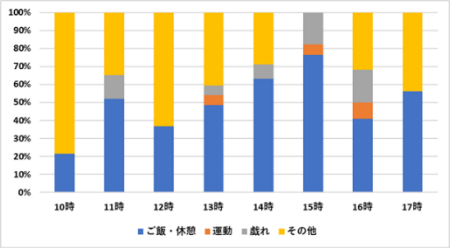


図３ 内覧会行動（平日）

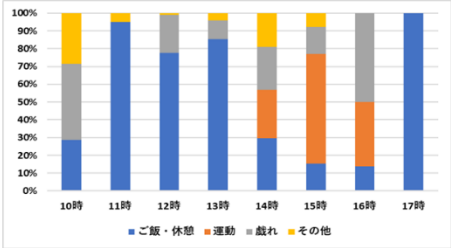


図４ 開園後行動（平日）

3.3.場所(平日)

開園後の芝生広場は利用者が増え A・B だけでは利用する場所が足りず、傾斜で利用しにくいC・Dも利用されるようになると考えていたが A・Bに利用できる場所に余裕がありC・Dを利用する人はいなかった。Bのステージ周りを利用する人が 10 月まで多かったが 12 月は減少している。この変化の要因はジブリパークと関係なく気温が下がりステージの屋根の日陰を利用する人が減ったからと考えられる

図５ 開園前場所（平日）

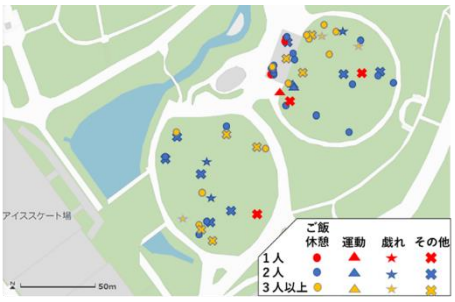


図６ 内覧会場所（平日）

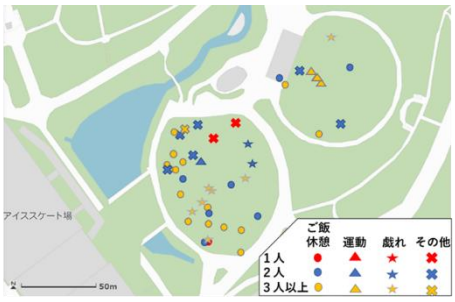


図７ 開園後場所（平日）

3.4.時間別の場所(平日)

9 月の 12 時より前の時間は利用者数が少ないが 10 月になり 10 時からジブリの有料エリアに入れるようになり 12 時より前に芝生を利用する人が出てきた。一時間ごとに入場制限があり入場までの待つ場所として利用されており休憩をする人が多いと考えられる。

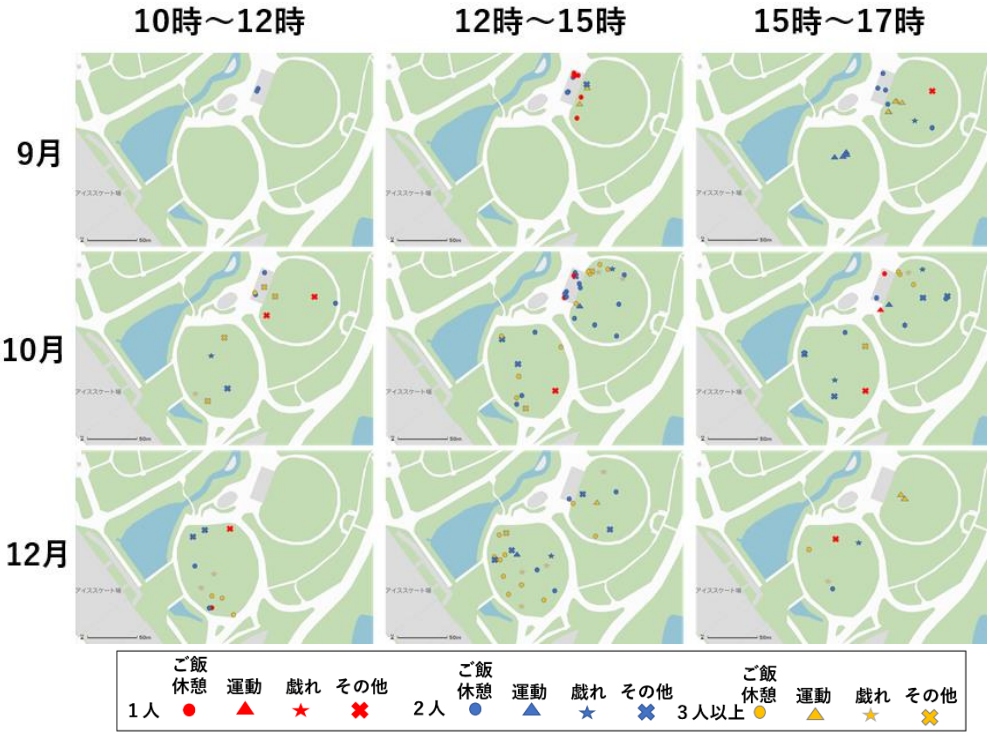


図８ 時間別の場所(平日)

3.5.利用者数(休日)

内覧会が始まった 10 月は 9 月に比べ広場の利用者数が 2 倍以上増加したが開園後の 12 月はイベントの開催で広場 B が利用で出来なくなってから 10 月の利用者数を上回ることがなかった。

表 2 広場の利用者数(休日)

	日付	平均気温	合計人数	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時
開園前	9/4(日)	25.8	183	11	19	19	24	25	22	30	33
	9/11(日)	24.7	111	6	5	10	18	25	18	13	16
	9/18(日)	23.3	81	0	0	0	12	24	13	22	10
内覧会	10/2(日)	20.5	453	26	29	89	65	61	65	66	52
	10/23(日)	16	687	28	44	120	133	167	112	59	24
	10/30(日	15.1	741	53	62	117	152	150	130	59	18

表 3 広場の利用者数(休日) 広場 B を除く

	日付	平均気温	合計人数	10時	11時	12時	13時	14時	15時	16時	17時
開園後	12/4(日)	7.9	122	0	17	42	31	10	7	15	0
	12/11(日)	6.5	366	14	52	74	78	58	51	36	3
	12/18(日)	5.5	21	2	0	2	2	5	5	2	3

3.6.行動内容(休日)

10 月の内覧会が始まっても 9 月に比べ大きく行動に変化がなかったが、12 月のイベントは屋台のなかに飲食店もあり 11 時から 14 時までの「ご飯・休憩」が 9 月、10 月に比べ増加して 12 時には 9 割以上が「ご飯・休憩」の場所として広場を利用するようになったが、体を動かせるスペースがなくなり「運動」の割合が減少したと考えられる。

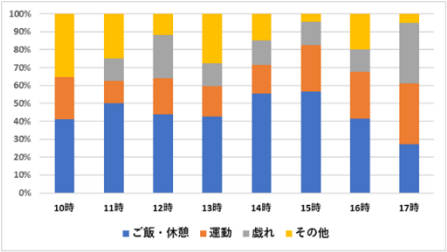


図 9 開園前行動(休日)

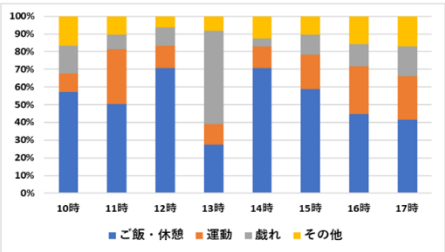


図 10 内覧会行動(休日)

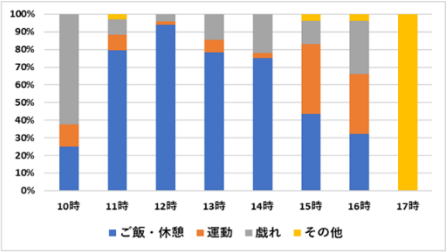


図 11 開園後行動(休日)

3.7.場所(休日)

9 月は気温が高く熱いと感じる人が多くステージの屋根で日影ができる広場 B を利用する人が多いと考えられる。広場 A の利用者が 10 月になり増加した要因としては広場 B の利用者増加と気温の低下から日陰を求める人が少なくなったことと利用者が増えて広場 B の利用スペースがなくなったことが考えられる。また開園後イベントで広場Bが使えなくなり、今まで利用されにくかった広場 C と D が利用されるようになった。

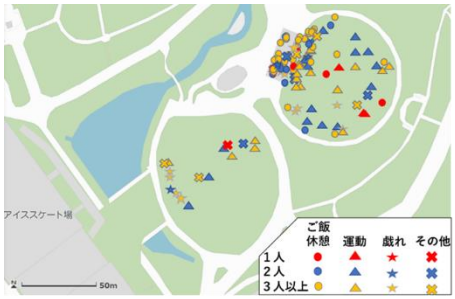


図 12 開園前場所(休日)

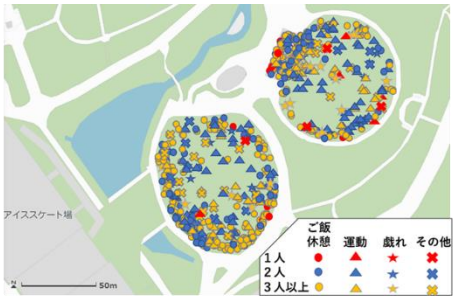


図 13 内覧会場所(休日)

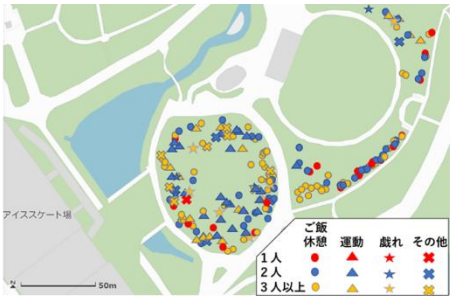


図 14 開園後場所(休日)

3.8.時間別の場所(休日)

内覧会が始まった 10 月になると 12 時以降に広場 A でも「ご飯・休憩」で利用されるようになった。また 12 月になり広場 B でイベントが開催されるようになると、12 時から 15 時の間に広場 C・D を利用する人が出てきた。イベントの屋台を飲食する場所として利用されるようになったからだと考えられる。

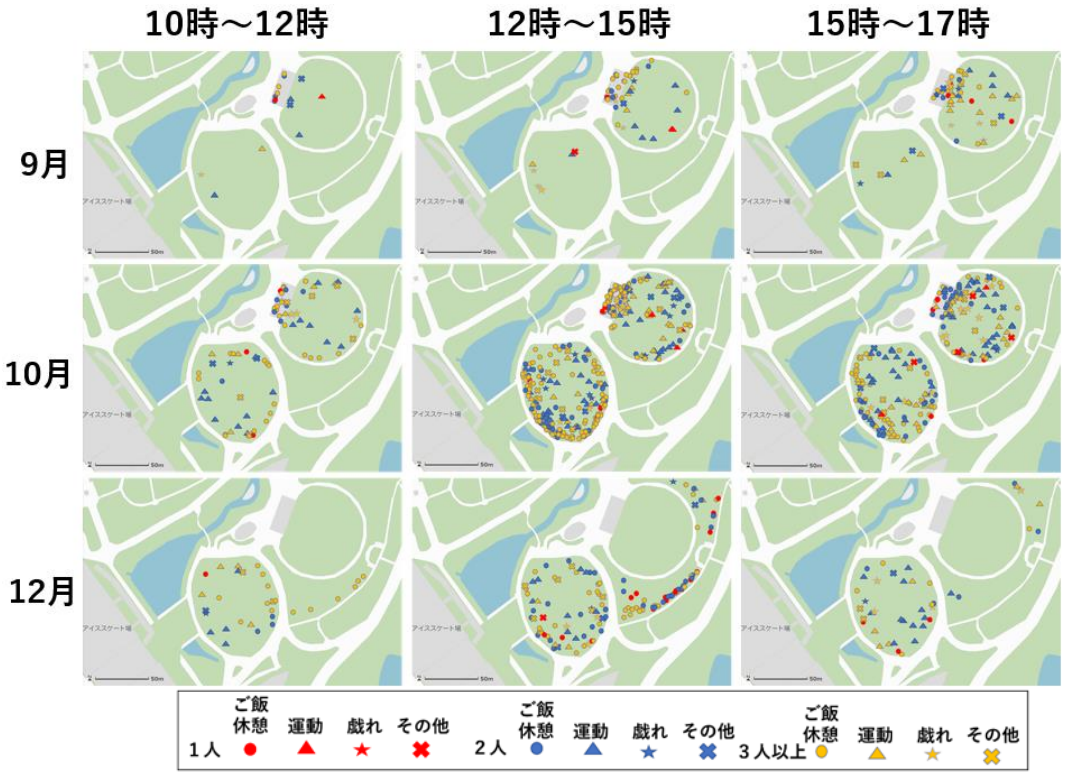


図 15 時間別の場所(休日)

4.まとめ

平日は 11 時から 13 時の間に保育園、小学校の団体で利用されるようになり利用者数が増加したが広場にまだ利用できる空間があり以前のように利用することができる。休日は芝生広場でのイベントが多くなり以前のように利用できる日が少なくなってしまう。またイベント有無かかわらず 12 時から 14 時の間は利用者が多く密集していて以前のように利用するのが難しい。開園した現在大芝生広場は休日のピーク時は広場のスペースが足りないと感じる。そこで広場 C より利用者が少なく傾斜で利用しにくい広場 D を平らにして広場 A・B のように天然芝にするとより使いやすいスペースができ大芝生広場の魅力向上に繋がると考える。

参考文献

地図/GSI Maps｜国土地理院,https://maps.gsi.go.jp/index_m.html,(参照 2022-11-26)

朝宮公園における改修事業後の利用変化に関する研究

EC19007 伊藤　健甫

１．序論

１－１　研究の背景と目的

現在日本各地で使われなくなった公園を Park-PFI 制度を利用してリノベーションを実施している事例が増えている。朝宮公園は Park-PFI 制度では無いが、リノベーションしている一つである。その中で朝宮公園は、以前までは緑が多く自然豊かな公園であったものの、あまり運動公園としての機能が果たせていなかった。それを解消させるため公園整備事業が行われた。その結果人は多く集められるようになったがその一方森林が伐採されてしまい朝宮公園の特徴であった緑が少なくなってしまった。

春日井市民のほとんどが一度は利用したことのある朝宮公園が公園整備事業で新しく生まれ変わることによって、春日井市民や他市から来る公園利用者や近隣住民にどのような影響をもたらしたのかを把握するため、本研究では公園整備事業の前後でのアンケート調査、ヒアリング調査を行い年代や性別などが遊び方や利用方法がどのように変化したかを明らかにし、より活用されるにはどうしたらいいのかを考えることを目的とする。

２．研究の枠組み

２－１　対象公園の概要

朝宮公園は春日井市朝宮町ある市の西部に位置する運動公園で、東に八田川、西に新木津用水が流れる緑豊かで静穏な環境は、多くの人々に親しまれている。公園内では部分的に整備工事を進めており、スポーツ施設として、陸上競技場、多目的広場、野球場、テニスコートとフィットネススタジオがある。

また、スポーツ施設のほか、遊具広場、芝生広場、和風園などがあり、レクリエーションや地域活動、催しなど様々な目的でご利用することができる。

図１　研究の対象の位置
朝宮公園ホームページより
https://www.spofurekasugai.or.jp/sports/asamiya/access/

２－２　研究方法

朝宮公園の概要を把握し、その後朝宮公園に現地調査に行き、利用実態を確認した。

公益財団法人春日井市スポーツ・ふれあい財団朝宮公園管理事務所にヒアリング調査を行い、その後近隣住民には google フォームを用いたアンケート用紙をポストに投函し、利用実態などを知るため、ポスティング調査を行う。朝宮公園中心部から約 250m と中心部から約 250m~約 500m の家を対象とし、それぞれ 180 部ずつ配布する。（表１）

公園利用者には口頭でのアンケート調査を行いその場での回答が難しい方は google フォームを用いたアンケート用紙を渡し web でのアンケート調査を行ってもらう。部数は 180 部配布した。（表２）それぞれ

の質問項目に利用目的や公園に対する改善点、不満点など（表３、表４）があるためそれらを参考して、考察やまとめを行っていく。

表１　アンケート調査の概要

対象	公園利用者
日時	2022/11/30・2022/12/04
部数	50部
方法	アンケート用紙を配りその場で回答

表２　ポスティング調査の概要

対象	~250m	250m-500m
部数	180部	180部
回答	34部	36部
方法	googleフォームを用いたwebアンケート	

表３　ポスティング調査の質問内容

・性別・年齢・職業・家族構成・誰と来園するか・
・所要時間・テレワーク・公園整備事業について・利用頻度
・利用頻度の変化・満足度・よく利用する場所・利用目的利用目的の変化
・ほかの公園利用・朝宮公園の課題・自然の伐採
・公園の管理状況・騒音問題・車問題・地域が魅力的になったか・その他意見や要望

表４　アンケート調査の質問内容

・性別・年齢・職業・住まいの地域・交通手段・所要時間・来園時間・滞在時間
・誰と来園したのか・利用頻度・利用頻度の変化・満足度・利用目的・利用目的の変化
・なぜ朝宮公園を選んだのか・公園整備事業について・公園の管理状況
・朝宮公園の課題・自然の伐採・駐車場について・朝宮公園に求める要素
・その他意見や要望

３．ヒアリング調査

３－１　ヒアリング調査結果

朝宮公園の利用方法の変化、県から市へ移管した経緯を明らかにすることを目的とし、公益財団法人春日井市スポーツ・ふれあい財団朝宮公園管理事務所にヒアリング調査を行った。

ヒアリング調査でなぜ愛知県から春日井市に移管したのか質問したところ、移管する前は民間の会社に管理を任せていたが赤字続きであったため、愛知県としても問題視されていた。その同じ時期に岡崎市が同じように公園を移管した。春日井市が名古屋市にお願いをしも岡崎市同様に朝宮公園を春日井市に移管した。

公園整備事業前と後での利用者の変化についての質問では、公園整備事業前ではグラウンドを利用するのはクラブチームの 1 チームだけであったが、公園整備事業後では個人利用もあるためクラブチームだけでなく高校生の体育祭や春日井市民の個人利用になど多くに人に使われているとの回答を受けた。

４．公園利用者のアンケート調査結果

４－１　公園の利用実態

アンケート回答者は主に家族連れが多くその年齢層は 20 代～50 代の子育て世代が多くみられ、その他には中学生など幅広い年齢層に利用されており（図２）、利用時間は 1 時間～３時間の利用が多かった。回答者は春日井市にお住まいの方が多く後は他市から来られた方が多少見られたが県外から来られた人はいなかった。利用目的は、散歩やウォーキング、ランニングと言った運動目的の人と遊具利用、遊具利用を伴わない遊び目的の人々が多く見られた。

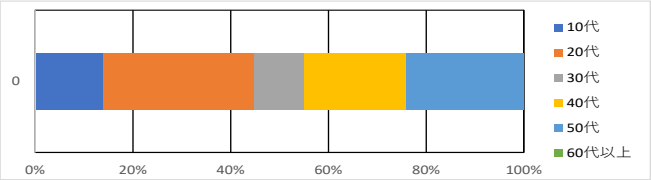


図２　年齢層

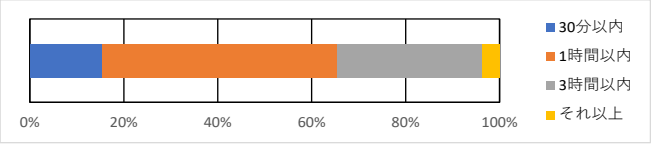


図３　利用時間

４－２　課題・不満点

公園利用者からの課題や不満点は交通の便が悪い、駐車場が狭い、売店がないと言った声が多く寄せられた。自然が伐採されていることに関してもやむを得ないと回答された人が多かったが、中には自然が多いほうが良いといった回答もみられた。（表 5）

表５　課題・不満点

	課題・不満点
公園利用者	・交通の便が悪い・休憩するスペースがない ・駐車場が少ない・安全性が欠けている ・雨が降ると何もできない・売店がない ・自然が多いほうがいい

４－３　改修事業前後の比較

改修事業前後では利用頻度が増えた、やや増えたが半分を占め、減った、やや減ったとの回答は一人も見られなかった（図 4）。利用目的も変わったと答えた方が多くなっており（図 5）理由としては、歩道が

整備されたことや明るくなったといった回答が見られた。（表 6）満足度も改修事業後の方が満足と回答された方が多かった。（表 7）

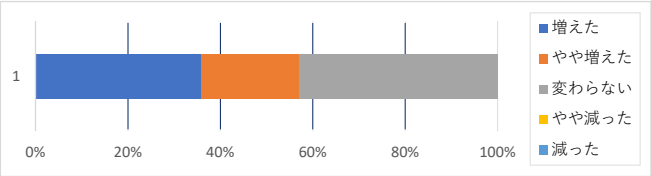


図 4　　公園利用者の利用頻度の変化

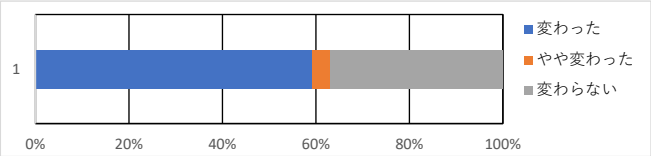


図 5　　公園利用者の利用目的の変化

表 6　利用目的の変化の理由

	利用目的の変化
公園利用者	・明るくなった・歩道が整備されたから・フィットネスジムを利用するようになった・コースがせいびされたから・噴水、遊具を使うようになった・

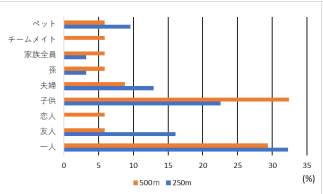
表 7　満足度

満足度の変化	
改修事業前	3.4(%)
改修事業後	96.6(%)

5．近隣住民のポスティング調査結果

5－1　近隣住民の公園利用実態

近隣住民は主に一人での利用と子供との来園が多かった。（図 6）利用頻度では月に 1、2 回の利用が多く使ったことがない方は 250m 圏内では 0 人で 250m～500m 圏内の方は 5.9%程度であった。（図 7）利用目的では、散歩目的で利用する方が共に一番多かった。（図 8）



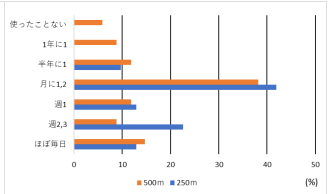


図 6　誰と来園するのか　　図 7　利用頻度

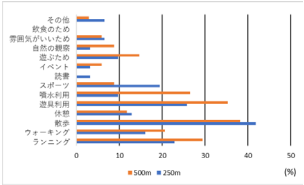


図 8　利用目的

5－2　課題・不満点

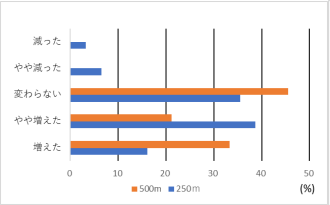
250m 圏内の近隣住民からの課題や不満点では公園利用者の車が駐車場に収まりきらず路上駐車や周りの道の混雑が挙げられた。また、250m～500m 圏内の近隣住民からはペットの散歩やペットとの触れ合いがしたいが子供が多くて遊ばせられないといった回答が見られた。ほかにも公園利用者と同様に自然が少なくなってしまったのが残念という回答も数件見られた。（表 8）

表 8　課題・不満点

	課題・不満点
近隣住民（~250）	・送迎サービスがあるといい・なるべく自然な木々を残してほしい・犬も安全に遊ばせられる場所があっても良かった・エリアを分けるなどして深い森林を残すなど、木を増やしてほしい・駐車場がもう少しあるといい
近隣住民（250~500）	・犬の散歩に制限があるので、ドッグランを作って欲しい・県営の時の静かな公園の方が良かった・売店が欲しい・屋根のあるフリースペースが欲しい・バスケットゴールがあると良い・駐車場を公園外にもほしい

5－3　改修事業前後の比較

公園整備事業前後で利用頻度は朝宮公園中心部から約 250m と中心部から約 250m~約 500m の利用頻度の変化の回答結果を見てみると減った、やや減ったと回答された方はわずかであり増えた、やや増えたと回答された方が多かった。500m 圏内の近隣住民は減った、やや減ったと回答した人はいなかった。（図 9）利用目的の変化では変わらないと回答された方が多かったものの、変わったと回答された方はフィットネススタジオを利用するようになったと回答された方も見られた。（表 9）500m 圏内の近隣住民は遊具利用するようになったなどといった回答が見られた。（図 10）満足度はどちらも公園整備事業後の方が満足と回答された方がほとんどを占めた。（図 11）地域が魅力的になったかという質問ではどちらも 6～7 割の人がなったと思う、やや思うと回答せれた。（図 12）



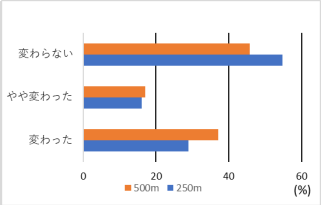
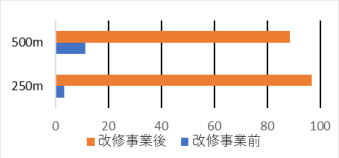


図９　利用頻度の変化　　図 10　利用目的の変化

表９　利用目的の変化

	利用目的の変化
近隣住民 (~250)	・フィットネススタジオを利用するようになったため ・ウォーキングコースを利用する為
近隣住民 (250~500)	・遊具広場に人が増えた。 ・競技場外周をランニングしている。・魅力が増えたから。遊具利用するようになった。・個人利用日にランニングするようになった・フィットネスジムに行くようになった・遊具を利用することが増えました。 ・昔は遊びに行くほどの物がなかった



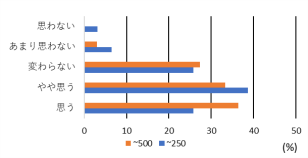


図 11　満足度の変化　図 12　街の魅力度の変化

6.考察

本研究で朝宮公園の公園整備事業は近隣住民や公園利用者からの満足度が上がっており、公園整備事業に賛成と答えられた方も多く見られたため、整備事業前よりも使いやすい公園になったと考える。

近隣住民は公園から 250m圏内の方々の利用頻度や利用目的は変わってないと答えられた方が見られたが、ペットや一人での利用をしているとの回答も見られたので整備事業前から利用しているため変わらなかったと考察する。250m～500mの周辺住民からはペットや一人での利用をしているとの回答の方は整備事業前から散歩等で利用していたからだと考える。変わったと回答された方は新しくできた遊具やフィットネススタジオ、陸上競技場の利用をするため利用頻度が増えたのではないかと考察する。公園利用者の利用頻度、利用目的が増えた理由としては、アンケート調査をした際、遊具利用者がほとんどであったため遊具広場が新しくなり、使いやすくなったため増えたと考察する。

一方で公園利者、近隣住民の両方から上がった駐車場問題は、どちらも足りないとの意見が多くあった。新しく公園内に駐車場を作るのはなかなか難しいと考える。そのため公園周辺調査し駐車場の確保をする必要があると考える。公園利用者の回答にあった自然が少なくなってしまった問題点は、専門家に依頼し残すべき自然などを調査することも考えていくべきであると考える。

7．結論

朝宮公園の整備事業を行ったことで、今まで利用したことの無かった人や、改修事業前より使うようになった人が増えており、ウォーキングコースが整備されたことや幅広い年齢層に使いやすくニーズに合った公園になった。それにより公園整備事業前よりも存在価値が高くなったことは確かであり、市民にとってもより良いものとなった。その一方で駐車場問題や自然問題など新たに生じた問題点もあるため一つ一つ解決していくことによって誰もが安心して利用しやすい公園となる。

謝辞

本研究を行うにあたり朝宮公園利用者、近隣住民の方々、公益財団法人春日井市スポーツ・ふれあい財団朝宮公園管理事務所の皆様にかかわっていただきました。この場を借りて深くお礼申し上げます。

参考文献

朝宮公園ホームページ
https://www.spofurekasugai.or.jp/sports/asamiya/access/　（2023/01/03）
https://www.city.kasugai.lg.jp/shimin/bunka/sports/asamiya/1006040/index.html　（2023/01/03）
Park-PFI 制度導入を核とした官民連携まちづくりの展開に関する一考察 －和歌山市本町公園における行政・都市再生推進法人等の取組を通じて－
https://cir.nii.ac.jp/crid/1390009316338282240
（2023/01/03）

中部大学　工学部　都市建設工学科

2022 年度卒業研究論文概要

木曽川スケートボード場公園の利用実態に関する研究

EC19016 太田貴仁

1.研究の背景と目的

スケートボードは、2020 年に開催された東京オリンピックで、初めて競技種目に認定され、金メダル 3、銀 1、銅 1 を日本にもたらした事もあり、競技人口が大幅に増加したスポーツである。しかし、全国的にスケートボード場が少なく、施設が整えられているスケートボード場は決して多くないため、スケートボードを快適に行うことができないのが現状だ。木曽川スケートボード場は、インターネットに記載されていない、トイレや自販機、休憩場所がないなど全国的に見ても設備が整っていない場所である。また、近年コロナウイルスの影響で外出自粛をしている人が多くいる。自粛することのデメリットの一つに運動不足が挙げられる。運動不足を解消する手段の一つとして、公園の活性化が考えられる。しかし現状は、数年前と何も変わっていない公園が多くある。

本研究では、全国的に設備が整っているとされているスケートパーク場と木曽川スケートパーク場を比べ、現実的に出来ないことは省き、改善点を明らかにする。アンケート調査を行い、利用者の声を聞き利用実態を明らかにする事によって、活性化に寄与することを目的としている。

２.研究の枠組み

2.1　対象公園の概要

本研究は、木曽川スケートボード場公園を対象とする。木曽川スケートボード場公園は、愛知県一宮市東加賀野井原町に位置しており、一宮市が管理する広さ 707 平方メートルの公園だ。アクセスは、名古屋駅から下道50分、高速30分名鉄尾西線玉ノ井駅から徒歩5分、利用料金は無料で、駐車場は 20 台程駐車できるスペースがある。

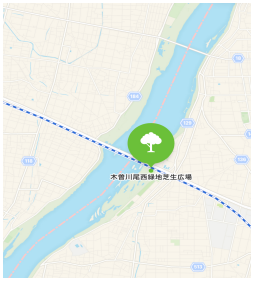


図1　位置図

写真1　航空写真

写真2　全体写真

2.3　研究方法

対象となる木曽川スケートボード公園概要を把握し、比較対象とする全国のスケートボード場（村上市スケートパーク、碧南スケートボード場）の調査をする。その後、木曽川スケートボード公園の整備実態を把握、利用実態調査（・気温、天候、時間別の利用者数の変化・ヒアリング調査）を行う。結果をもとに改善点を明らかにし、木曽川スケートボード公園の魅力向上に関する考察、結論を出す。

3. 木曽川スケートボード公園の空間利用について

木曽川スケートボード公園をより発展させるためには、スケートパーク内の活性化が必要だ。全国で一番施設が整っていると言われている村上スケートパークと、木曽川スケートボード公園の空間利用を比べ実態を明らかにする。

3.1 村上市スケートパークの概要

村上市スケートパークは、新潟県村上市瀬波温泉三丁目 2 番 22 号に位置しており、民企業が運営する、広さ約1,500 平方メートルの日本最大級の全天候型のスケート施設だ。開館時間は 9:00～21:00、利用料金は1回500円となっている。今回のオリンピックに出場した日本人全選手が、ここで事前合宿を行った。

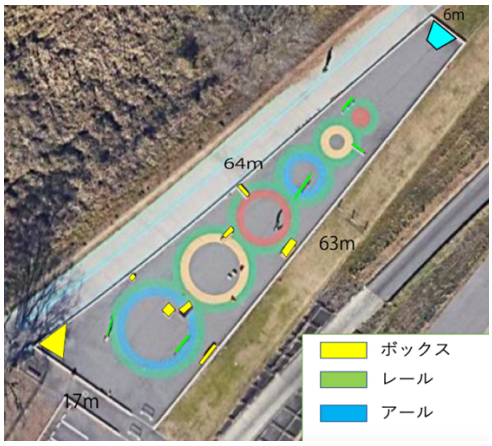


図2 木曽川スケート場公園

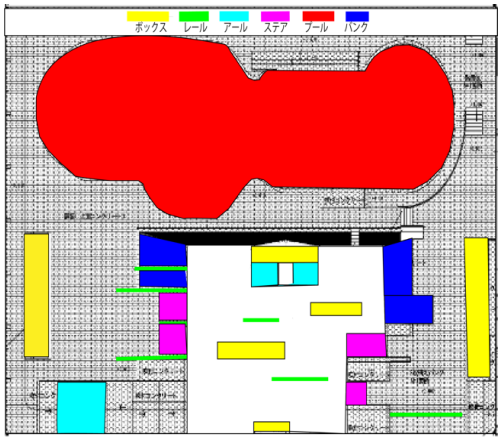


図3 村上スケートパーク

写真3 レール

写真4 ボックス

写真5 アール

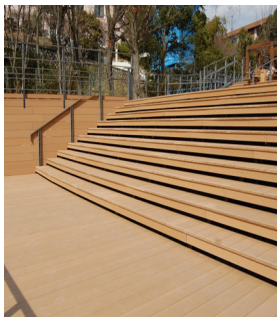


写真6 ステア

写真7 プール

図3.1図3.2は木曽川スケートボード公園と村上スケートパーク内の施設を色分けしたものである。一眼でわかるように、施設の数や種類が大幅に違うことがわかる。また、木曽川スケート場公園は施設がバラバラに置いてあるのに対して、村上スケートパークはほぼ横並びにおいてあり、一定方向にしか進めないことがわかる。これは、人の衝突を防ぐものだと考えられる。このように、木曽川スケート場公園は、競技性や安全面の改善点が多くある。

木曽川スケートパークの使われ方

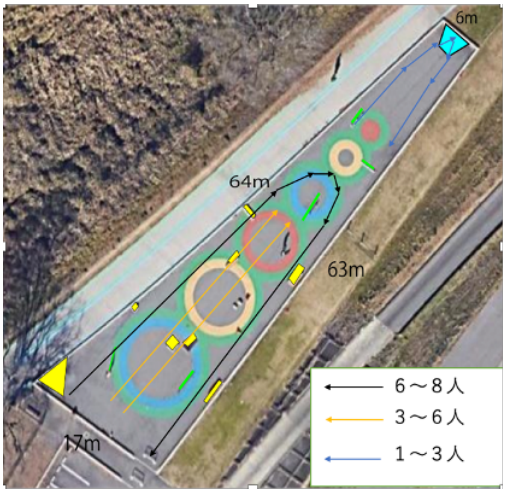


図4 利用者の移動経路図

木曽川スケートボード場はボランティアでセクションを寄付されていて、他のスケートボード場にはないユニークな使われ方をしている一方で、利用されていない空間が多く、改善する必要があると思ったため、木曽川スケートパークの使われ方について明らかにしていく。

図3.3は木曽川スケートボード場の利用者の移動経路図である。場所によって利用している人数が大幅に違うことと、移動経路に規則性があるということが分かる。特に図上側のスペースはほとんど利用されていなく、新しいセクションを置くなどの改善点が必要だ。黒色矢印の経路人数が一番多い理由は、スケートパークの端にセクションが、かたまっているからである。

4. 利用実態調査

4.1 気温、時間別の利用者数の変化

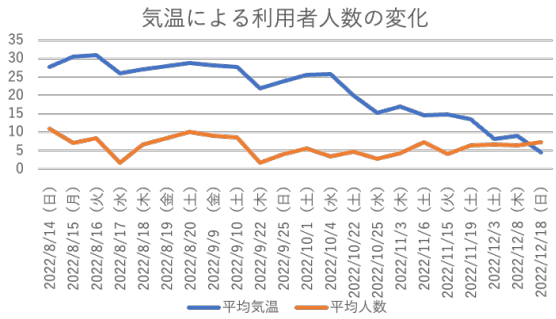


図5 気温による利用者人数の変化

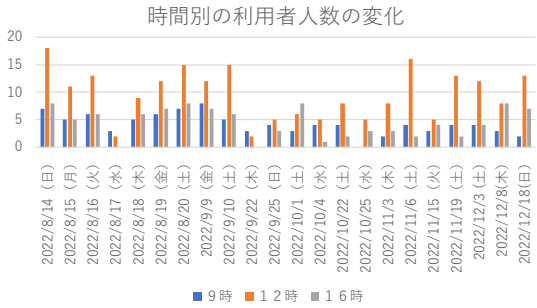


図6 時間別の利用者人数の変化

スケートボードは、気温に大きく左右されるスポーツな事もあり、気温が 30 度以上の時は人が増加し、20度以下になると減少する傾向にあった。また、土日12時の利用人数が一番多い。また9時、16時に利用しているほとんどの人が、練習をするためにわざと利用人数が少ない時間帯を選んでいるということがわかった。

4.2 ヒアリング調査

木曽川スケートボード公園の実態調査をしていく上で、改善するべき点が多く見られた。しかし、私自身が利用しているわけではないため、明らかになっていない点が多くあると思う。ヒアリング調査をするにあたり、実際に利用している人が木曽川スケートボード場についてどう思っているのかを明らかにしていく。

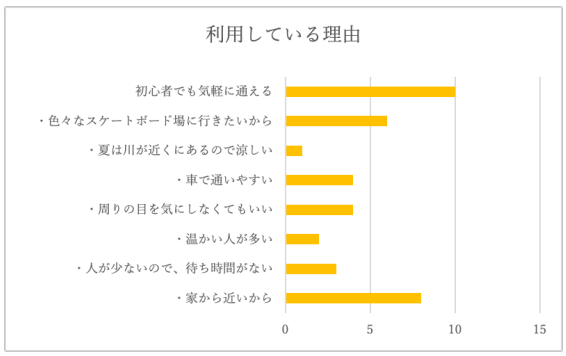


図7 木曽川スケートボード公園を利用している理由

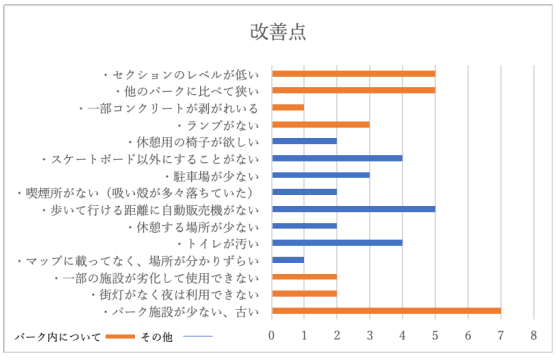


図8 木曽川スケートボード公園の改善点

今回ヒアリング調査に協力していただいた方の人数は20人、上記の図には同じ解答の人は省いている。特に注目したい回答は、街灯がなく夜は利用できない、歩いて行ける距離に自動販売機がない、マップに載ってなく、場所が分かりずらいだ。これら全て、第3章で紹介したスケートボード場には備わっていて、改善する事により活性化を促すことができる。またセクションの数が少ない、古いなどと言った意見も多く出ている。 次章でも紹介するが、木曽川スケートボード場は、ほとんどのセクションが利用者からの寄付になっている為、ユニークなセクションは多くなるが劣化が早く、多く作れないのが現状である。

5. 競技施設を寄付している方へのヒアリング調査

ヒアリング調査を行なっている中で、木曽川スケートパークには競技施設を寄付してくれる方が数人いることがわかった。この章では、寄付していただいている一人のマサさんからお話を伺った内容を述べる。

名前:マサさん **年齢**:38 歳 **所在地**:羽島市在住 **利用頻度**:毎週土日

寄付しようと思ったきっかけや理由

毎週土日になると子供達と滑りに行き、次第に上達して行く息子達を見て、仲良くなったスケーターの子達と、こうゆうセクション（競技施設）があったらいいよねって言い出したのがきっかけで、作ってみようと制作を始めた。基本的にはお金はもらっていなく、みんなで楽しく滑って上達してくれたらいいなと言う気持ちで作っている。今は羽島にプライベートパークを作り始めてるので木曽川スケートボード場にはたまにしか行かなくなってしまったんですが、また行っては修理などはしている。私自身、木曽川スケートボード場意外のパークに行く事も多いのだが、やはり比べると施設は整っていない。しかし木曽川スケートボード場には、他にはない人の暖かさや、繋がりが多くあるので、これから良くなって行くのが楽しみだとマサさんは語った。

写真8　セクション制作風景1

写真9　セクション制作風景2.

写真10　セクション完成

6. 結論

今回の研究で木曽川スケートボード場公園の利用実態を明らかにした。ヒアリング調査をした結果、街灯がなく夜は利用できない、歩いて行ける距離に自動販売機がない、マップに載ってなく、場所が分かりずらいなど、スケートパーク内外問わず改善点が出た。これら全て、第3章で紹介したスケートボード場には備わっていて、改善する事により活性化を促すことができると考えられる。一方で、人の暖かさを感じると言った意見も多くでた。木曽川スケートボード場は、ほとんどのセクションが利用者からの寄付になっている為、セクションを制作する際に人と人とのコミュニケーションがとれ、人の暖かさを分かち合えることが、他のスケートパークにはない木曽川スケートボード場公園の良さだと考える。

また、木曽川スケートボード公園の空間利用については、木曽川スケート場公園と村上スケートパークを比べた結果、木曽川スケート場公園は、競技性や安全面の改善点が多くあり、利用者が楽しめる施設にするのはもちろん、安全性にもこだわって改善する必要があると考えられる。

木曽川スケートボード場公園を調査して行く中で、スケートボードパークは、機能性や安全性だけではなく、他者とのコミュニケーションを育む場として利用されるべきである。木曽川スケートボード場公園は、パーク内外問わず様々な改善点があるが、ボランティアで競技施設を寄付している方が多くいる為常に進化しつずけている。また、その活動がきっかけとなり、人と人との繋がりが多くなっている。全国的にまだ整えられていないスケートボードパークは多くあるため、木曽川スケートボード場公園のように、街のスケーターたちが一体となり活性化を促せば少しでも豊かなものになるのではないかと考える。

参考文献

1）　村上市公式ウェブサイト,村上スケートパーク,https://www.city.murakami.lg.jp/site/skate-park/,
(参照 2022-9-10)

2）　愛知県碧南市公式ウェブサイト,碧南スケートパーク
https://www.city.hekinan.lg.jp/soshiki/kaihatsu_suido/toshi_seibi/park_info/13828.html ,(参照　2022-9-10)

2022 年度卒業研究論文概要

都市公園における官民協働活動に関する研究
～戸田川緑地に着目して～

EC19022　加藤　智士

1.　研究の背景と目的

現在公園は地域住民のニーズにとのミスマッチにより利用されなくなった場所が生じてしまっていたりしている。施設の老朽化や管理不足による荒廃化が進むのと同時に、ニーズの変化を原因とする利用率の低下や安全面の悪化などの様々な問題を抱えている現状にある。そこで既存の都市公園の再整備・維持管理を進めること、地域のニーズに合わせた活動の場とすることが主な課題となっている。そこでパークマネジメントにおける住民と行政との協働活動が必要となり、パークマネジメントとは「公園の魅力や可能性を発掘し、資質を向上視点から管理を行い、継続的に業務の改善を行う仕組み」や「積極的にプログラムを作り出して来園者を誘う公園の運営手段」と言われ公園魅力の増進のための一連の体制づくりと捉えられている。その中の官民協働活動を行うことで、市民の声やニーズが伝わり地域貢献活動の参加意欲にもつなげることができる。

そこで多種多様な都市公園が存在している名古屋市に目を付け、名古屋市が管理している「パークマネジメント名古屋」のパークマネジメントプランの協働活動に着目した。

協働活動を行っている公園を対象公園とし、その公園が協働活動によってどういう進みで官民の空間を作り出して来たかを明らかにすることでこれからの公園づくりにどう役立てていけるかを考える。

2.　研究の枠組み

2.1 研究対象の概要

「パークマネジメント名古屋」に掲載されている公園は 19 ある。それぞれ名古屋市内に位置しており、様々な特徴を持った都市公園となっている。それぞれの公園でなにかしらの協働活動を行っている。主な事例を挙げるとして「戸田川緑地公園」がある。戸田川緑地公園は名古屋市中川区と港区の狭間に位置しており南北 2.5 km、東西 0.5 kmに広がる市南西部最大の公園となる。協働活動は「なごや西の森づくり」という森づくりを主とした活動を行っている。図 2 の赤丸は戸田川みどりの森づくりを行っている範囲となる。マップの北にある芝生広場を囲む緑が活動を経て得た戸田川みどりの森となる。

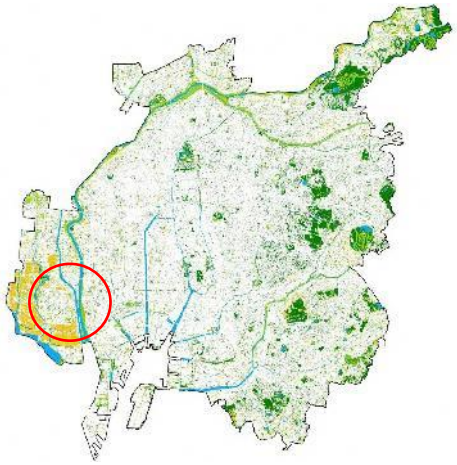


図-1　戸田川緑地の現在地

(https://www.city.nagoya.jp/shisei/category/53-3-3-0-0-0-0-0-0-0.html)

図-2　戸田川緑地のマップ

(http://bunkaen-todagawa.jp/parkmap.html)

2.2 研究方法

まず、パークマネジメント名古屋に記載されている 19 公園の協働内容、協働特徴をまとめる。その後協働が活発な公園に絞り研究を行っていく。必要に応じて公園の現地調査や団体、名古屋市へのヒアリング調査を行う。名古屋市へは管理している側から、団体へは運営している側からの意見を聞いた。ヒアリング調査と各所資料の「戸田川みどりの夢クラブ 10 年の歩み」、「なごや西の森だより」や「なごやの緑ガイドブック」等他 3 冊を駆使し、それをまとめ協働活動の実態を明らかにする。

3. 研究内容

3.1 パークマネジメント名古屋の公園の特徴

表 1　19 公園の特徴

公園名	種類	面積	協働活動	協働の特徴
千種公園	地区公園	5.94ha	ボランティア・その他	清掃活動、除草作業のボランティアのみ
徳川園	特殊公園	4.53ha	ボランティア	常駐のガイドサービスのボランティアのみ
志賀公園	地区公園	5.25ha	公園愛護会	月1の清掃活動のみ
名城公園	総合公園	80.41h	公園愛護会	月1の清掃活動のみ
庄内緑地	総合公園	47.39h	ボランティア・自然観察会	花壇管理、園内ガイドボランティアのみ
中村公園	地区公園	6.27ha	ボランティア	花壇づくり、清掃活動のみ
鶴舞公園	総合公園	24.07h	ボランティア	ボランティアのみ
瑞穂公園	運動公園	24.46h	ボランティア	清掃活動のボランティアのみ
白鳥公園	地区公園	8.22ha	白鳥庭園との連携	除草活動のボランティアのみ
神宮東公園	地区公園	8.09ha	公園愛護会	月1の清掃活動のみ
松葉公園	近隣公園	3.09ha	公園愛護会	除草清掃、花壇の手入れ
荒子川公園	総合公園	26.10h	ボランティア・愛護会	荒子川公園サポートクラブの園内作業 体験教室のラベンダーを絡めた活動
稲永公園	運動公園	31.36h	ボランティア	清掃活動のボランティアのみ
戸田川緑地	総合公園	29.11h	なごや西の森づくり	なごや西の森づくりの森づくりをメインとした活動
日光川公園	運動公園	11.52h	近隣企業とのイベント	近隣企業や住民団体との連携
呼続公園	地区公園	4.35ha	公園愛護会	月1の清掃活動のみ
滝ノ水緑地	都市緑地	4.42ha	緑のパートナーの活動	緑のパートナー「滝ノ水緑地の里山と湿地を育てる会」の活動
水広公園	地区公園	5.79ha	公園愛護会	月1の清掃活動のみ
細口池公園	地区公園	4.22ha	公園愛護会	月1の清掃活動のみ

表 1 にはパークマネジメント名古屋に記載されている19の公園とその協働活動と協働活動の特徴を記したものである。荒子川公園、戸田川緑地公園、滝ノ水緑地以外の公園は協働活動を特に何もしておらず、月何回かの清掃活動やボランティア活動しかしておらず協働活動をしているとはあまり言えない状況にあると考える。逆に挙げた 3 つに関しては大規模な森づくりや小規模ながらでも企業や地域住民との連携や団体を作って活動を行っている。

名古屋市のパークマネジメントの協働活動の特徴としては清掃活動のボランティアが多く、協働活動として大規模で行っているのは戸田川緑地公園と言えると考える。

3.2. 戸田川緑地の協働活動

19 公園の中から協働活動が活発な戸田川緑地だけに着目する。20 年以上前から森づくりをメインとした協働活動をしており「戸田川みどりの夢クラブ」という団体が運営を行っており、活動をしていることが分かった。

今回その「戸田川みどりの夢クラブ」にヒアリング調査をした。目的としては戸田川緑地の協働活動の基本情報や背景を聞くために行った。そのヒアリング結果の一部としてまず西の森づくりの作った背景を知った。西尾市長時代に 1 日 2 回気温を測定した。そうした結果東の森がある東山公園地帯の気温が低いことが分かった。東に森が存在しているなら西にも作ろうという背景から西の森づくりが始まった。

表 2.3 には戸田川みどりの夢クラブの今までから現在の成り立ちを表している。名古屋市が「なごや西の森づくり」の基本方針を打ち出し、西の森をつくるという計画を立てた。戸田川みどりの夢クラブという森づくりという活動を運営していく団体を結成するため、名古屋市はボランティア講座を開催した。その講座に足を運び、森を作ろうと参加を表明してくれた人人々で結成したものが「戸田川みどりの夢クラブ」という団体になる。2003 年に発足し、現在で 20 年となる。その間にも様々なイベントや総会を繰り返し森づくりの発展や戸田川の発展に努めている。

現在で合計 6.3 万本以上の木の本数を 2.3 万人の努力と協力で今の戸田川緑地を形が見られる。

ボランティアとして集まった人には専門的な知識を持った人はいないが名古屋市からの支援や、専門的な知識・教養を持った大学の教授などを呼び、森づくりをよくするため工夫してきた。
名古屋市が企画・発信し、それに募った人々が団体となり、その団体が一般市民を集め巻き込んで活動をしていき、現在の形が成り立っている。

ヒアリング結果のメリット、デメリットとしてメリットとしては長年続けることでの「森」という象徴を得ることができた。デメリットとして挙げられたのが協働活動とは一種のボランティア活動となるため、世代交代のための人手や、それに伴い団体の高年齢化が進むため運動力としての人手も減少している。こういった続けることでのメリットもある中で課題点ももちろんあるため、団体のこれからの存続も危ぶまれている。

戸田川のこの団体の成り立ちから変遷を見たときに今まででたくさんのイベントや活動を行っていて人を呼び寄せるため動いている。

表 2　各主体の活動内容の変遷(2000 年～2014)

	夢クラブ主催の市民の活動等	戸田川みどりの夢クラブ	名古屋市
2000			名古屋市が森づくりの基本理念を作成
2001			名古屋市が森づくりの基本計画を作成
2002	平成14年10月14日　なごや西の森づくり2002 市民1万人が苗木13400本を植樹 ・西の森サポートくらぶ結成・活動スタート	ボランティアの募集 ボランティア説明会 森づくり講演会 サポートクラブ(仮称)	
2003	会の名称「戸田川みどりの夢くらぶ」で決定(15年3月)発足 平成15年10月19日　第3回植樹祭 ～遊ぼう学ぼう戸田川の森～ 戸田川みどりの夢くらぶ等の企画運営により開催 市民300人による2060本の苗木を植樹		
2004	平成16年11月7日　第4回植樹祭 ～遊ぼう・学ぼう・戸田川の森～ 手作り植樹祭　　ドングリ里親植樹 市民300人　1500本植樹 クラフト　紙芝居　交流会	ボランティア養成講座　全5回 森づくり講習会 専門家の助言・評価・技術的指導 森づくり計画・植生調査。森の手入れ	
2005	平成17年10月30日 第5回植樹祭　北地区 市民400人　1800本の苗木植樹	スタッフ要請講座　全5回　林進 森づくり講習会(計画会議)　林進 食害対策実習　処置法・適期・効果 活動の評価と助言・病虫害防除等	
2006	平成18年9月18日 愛・地球博開幕1周年記念植樹 北地区　800人800本 平成18年10月29日 第6回植樹祭　北地区　500人3165本	森づくりスタッフ養成講座(全5回)	
2007	平成19年10月21日 第7回植樹祭　北地区 市民1000人　2150本植樹	なごや西の森づくりスタッフ養成講座(全5回)　林進 なごや西の森づくり　森づくり計画講座　林進 森の現状と活動に関する評価	
2008		なごや西の森づくりスタッフ養成講座　全5回　真弓浩二 ・森づくりの報告・西の森の現状と活動の評価・助言	

	夢クラブ主催の市民の活動等	戸田川みどりの夢クラブ	名古屋市
2009	平成21年3月22日 第8回植樹祭　左岸 ～遊ぼう学ぼう戸田川の森～ 500人　2863本植樹 平成21年10月18日 第9回植樹祭1000人4210本	なごや西の森づくり作業計画 ・作業計画表・管理作業・森づくり作業 なごや西の森づくり計画会議 森の現状と活動の評価 22年度の計画について	
2010	平成22年10月24日 第10回植樹祭2000人1万本	なごや西の森づくりスタッフ養成講座(6回) なごや西の森づくり　西の森計画会議 森の現状と活動に対する評価について	
2011	COP10開催記念植樹左岸 3月6200人　773本 平成23年5月14日中部電力60周年記念植樹 「豊かな地域づくりin戸田川緑地」左岸 社員414人　苗木を1000本を植樹 平成23年10月30日 第11回植樹祭　1100人2010本	なごや西の森づくり森づくり講習会　2月10日 森づくりの知識や技術の取得　間伐採打等 なごや西の森植生調査　環境設計 1)毎木調査　2)植栽林の健全度及び目標植生の達成度 3)管理手法の検討と管理計画の修正 なごや西の森づくりスタッフ養成講座全6回 なごや西の森づくり計画講習会(全4回) ・目指す森の姿の市と活動団体の共有 ・森づくり20年プランの見直し ・ゾーンごとの維持管理計画づくり	
2012		なごや西の森維持管理計画　制定　平成24年4月 環境大学「共育講座」3回 なごや西の森を作ろう森の観察	
2013	平成25年10月27日　戸田川の森感謝祭	林先生による森づくり評価　2月7日 フィールド質疑より ・間伐の方法、季節、目的は適切に ・センダンは役割を終えた、次の役割を持つ木を選木	
2014	戸田川クリーン作戦160人参加	環境デー2014	

表 3　各主体の活動内容の変遷(2018～2022)

	夢クラブ主催の市民の活動等	戸田川みどりの夢クラブ	名古屋市
2018		環境デー2018 森づくり講座 とだがわの森感謝祭 スキルアップ講座　小林氏	
2019	戸田川緑地春祭り 親子125名が参加	戸田川中流域クリーンキャンペーン 187名が参加 環境デー2019	
2020		クリーンキャンペーン 236名でごみ掃除 新型コロナウイルス発生 講座ストップ、活動時間短縮	
2021	福原小学校出前クラフト講座 夢クラブ活動パネル展示(農業科学館) 戸田川の森感謝祭 約160名		
2022	さつま芋堀、焼き芋イベント 5家族16名が参加 シイタケ菌うち体験講座 5家族17名 シイタケ収穫体験 4家族15名参加	樹木剪定クイズ 樹木に関する勉強 森保全活動 農園の手入れ	

この表の 2022 年以降にも一般市民を巻き込んだイベントはずっと続いており、20 年前から人を呼んだ活動というものはやめていない。緑色は植樹のイベントになり、黄色は親子対象のイベントになる。

4. 考察

まずヒアリング結果から協働活動におけるメリット・デメリットが明らかになった。メリットとして出てきた「森」という象徴的なものができたということで日が自然に公園に寄り付くようになり、活気のある公園になった。森づくりという大規模なものを作りあげるにはたくさんの人材と時間が必要となる。こういったことを 20 年行うことができたのはそれだけ戸田川みどりの夢クラブの人たちや関わった人たちに戸田川緑地に対して愛着があると考えることができる。デメリットの部分の世代交代関係や団体民の高齢化などは団体の存続に関わるものになり、それが続くと最終的に森づくりへの影響が出てくるのではないかと考える。この先の森づくりや団体の存続や影響を考えるならば戸田川みどりの夢クラブの人員強化やＰＲ力をつけなければならないのではないかと考える。

しかし団体事態の存続が厳しくなっている現在の状況でもイベントごとは欠かさず行っている。毎回のイベントでたくさんの市民を呼びよせ、動員することができる力やポテンシャルはあると考える。何

年、年十年も戸田川の森に尽くしてきたからこそ、こういった遺産・財産となるような動員性となるものができたのではないかと考える。もし今の団体の戸田川みどりの夢クラブが無くなったとしても他の組織が立ち上がれば、ポテンシャルを持つこの協働活動は成り立っていくのではないかと考える。また表 2 では基本的に植樹づくりやイベントごとには参加していたが、表 3 の 2018 年からは参加率が著しく低下している。全体的なイベントも森づく理がメインの協働活動になるため 2014 年前までは森づくりの植樹がメインとなっているが、2018 年からはイベントが農に関するものになり、親子を対象としたものが多い。これは森づくりがひと段落したタイミングであり、他の緑に関するイベントを行い再び人を集めたい目的ではないかと考える。

森づくりに関わったことがない人でも気楽に公園に来ることができるイベントづくりを作成しているのかと考える。

5. 結論

まずパークマネジメント名古屋に記載されている公園を見た際に大きく協働活動を行う公園は少なかった。ほとんどの公園が清掃、除草だけの活動を行っていてこれらの公園の活動はこれからの公園づくりに役立たせることはできないものだった。しかし戸田川緑地の協働活動は大規模な森づくりということで参考にできるものがあると感じた。

戸田川緑地の協働活動を活動内容の変遷から流れを見たときにそれぞれの役割が見えてきた。基本的に名古屋市は企画や発信をし、森づくり・戸田川緑地を後ろから支える存在になっていた。戸田川みどりの夢クラブは名古屋市と協力しあい、自らイベントや行事を行うことで戸田川みどりの森づくりを盛り上げていた。森づくりにはマンパワーが必要の中、戸田川みどりの夢クラブという市民と行政を繋ぐ、受け皿になる団体を作ることで一般市民を動かすことのできる力を確保することができた。

パークマネジメントの協働活動をするにあたってこういった人を動かす力動員性には問題が無いと見える。しかしこの動かすための市民と行政の間に立ち、核となる受け皿となる組織が高齢化していきそこが課題ということが明らかとなった。核となる市民の担い手が不足し存続が厳しくなってしまうことがこれからの問題点となる。

公園や緑の、癒しや安らぎの空間としての需要は現在高まっているため、この森づくりという協働活動はとても有意義なものとなっている。しかし団体の担い手がいない以上、核となる部分が居なくなってしまうため動員性や森づくりの存続のためにも解決しなければいけない点だと考える。

それぞれ役割としての移り変わりや、活動内容も含めてたくさんの変化がみられる。役割や課題を把握し、官民一体となって協働活動をすることで有意義なものになると考える。

参考文献

1）名古屋市作成戸田川緑地園内マップ
http://bunkaen-todagawa.jp/parkmap.html
(参照 2022 年 12 月 5 日)
2）名古屋市緑政土木局緑地部緑地利活用課公園経営係作成パークマネジメント名古屋(戸田川緑地)
https://www.city.nagoya.jp/ryokuseidoboku/page/0000060436.html(参照 2022 年 12 月 5 日)
3）戸田川みどりの夢クラブの資料より
戸田川みどりの夢クラブ：戸田川みどりの夢クラブ 10 年の歩み　平成 26 年 9 月
4）戸田川みどりの夢クラブ：名古屋西の森だより 2014 年から 2022 年
5）大舘　学：なごやの森づくりガイドブック　2009 年 10 月
6）齊藤　充弘：いわき市を対象とした東日本大震災前後の小中学生にみる遊びと公園利用の変化について　都市計画論文集 No.52 , pp754-761, 2017 年 10 月
7）上野　裕介：人口減少時代の都市緑地のグリーンインフラとしての活用方策 - 茨城県守谷市における大規模住民アンケートの結果から　土木学会論文集Ｇ（環境） No.75 (6), pp169-176, 2019 年
8）小池沢　将之：都市公園に隣接する児童遊園の更新の可能性の検討　都市計画論文集 No.56 (3), pp657-664, 2021 年 10 月
9）齊藤　勝弘：Park-PFI 等における民間事業者選定の審査傾向と収益施設へのデザイン的影響に関する考察　都市計画論文集 No.55, pp1439-1446, 2020 年 10 月

中部大学　工学部　都市建設工学科

2022 年度卒業研究論文概要

癒しの場としての緑道の可能性に関する研究
～名古屋市内を対象として～

EC19034　小塚　結貴

1.研究の背景と目的

1980 年（昭和 55 年）に名古屋市の緑道整備の基本的な指針を示した「名古屋市緑道基本整備計画」が公表された。この計画の内容としては、みどりゆたかな楽しく歩けるみちづくりをすすめ、市民の誇りとなるような個性豊かな、住みよいまちを実現していくための今後の計画が書かれたものである。しかし、「名古屋市みどりの基本計画 2030」には、市内のみどりを知るためのウォーキングイベントを行うことしか書かれていない。また、少なくとも 9 か所の緑道は重要視されていないような状態であった。一方、過去の論文 [1)]にある健康に関する研究データでは、地域の樹木の量が多いほどうつ病に良いという結果が出ている。このことから身近にある樹木の多い場所である緑道にも癒し効果があるのではないかと考える。また、今でもストレス社会が続いており、ストレスが溜まるとこころの病になってしまう恐れもあるため、このような癒しの空間が必要になってきていると考える。研究対象の緑道は名古屋市内の住居地にある緑道（9 か所）とする。理由として、過去の論文 [2)]の調査結果から景観の評価が高かったからである。その中からさらに種類分けをし、周辺環境（住宅地）が似ている庄内用水緑道と天満緑道とする。

本研究では、庄内用水緑道と天満緑道の現状とその緑道の近辺に住んでいる住民がどのように利用しているのか。また、それぞれを比較し、各緑道の設えの違いが利用する時間帯や目的などにどう影響するかを調査することで、癒しの場としての利用できる可能性があるのか知ることを目的とする。

1.2.研究の方法

最初は緑道と癒しの場について調べた後、9 か所の緑道へ現地調査に行った。そこから緑道を更に種類分けし、研究対象の緑道を 2 か所まで絞り、その緑道の土地や緑、水の設えなど詳細を知るために何度もその 2 か所に現地調査を行った。

また、その緑道の周辺の住民にアンケート調査を行い、「癒しの場」として利用している及び利用できるのか、緑や水の設えから利用目的や癒しの対象などの違いについて明らかにした。その後、調査の結果をグラフに表し、分析と比較を行った。

2.研究対象地域の概要

庄内用水緑道は名古屋市北区に位置しており、名古屋市内最大の用水がある。かつては農業用水だったが都市化の進展により、地域の快適な環境づくりのため、総延長の約 1/4（5800m）を緑道として整備された。道幅は約 3.3m（車道を含めると約 8.3m）、緑視率は平均 12.8%である。

天満緑道は名古屋市千種区に位置しており、上野天満宮の近くにある。かつては天満通と呼ばれており、上野天満宮までの通り道の 1 つのとして利用されていた。道幅は 3.5m、緑視率は平均 21.0%である。

3.研究する緑道の特徴

3.1.現地調査による結果から種類分け

名古屋市にある 9 か所の緑道に行き（図 1）、現地調査を行った（図 2）。9 か所の緑道に共通していたのは人が少なかったことである。そこから更に種類分けを行い、その 9 か所の緑道の中から赤線で囲った条件が共通していたため、庄内用水緑道と天満緑道の 2 か所を対象地域とした（表 1）。

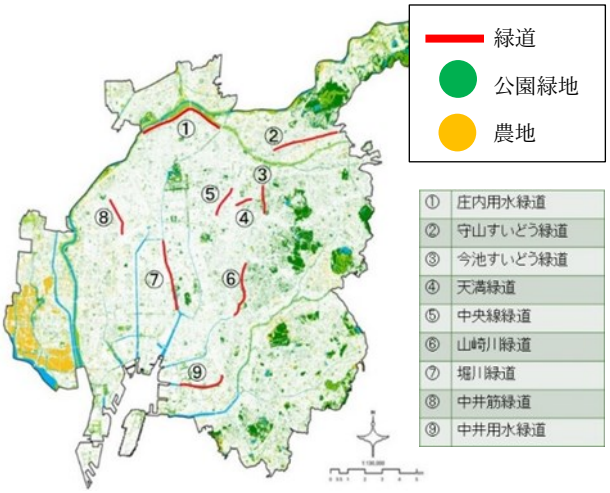


図 1　現地調査に行った 9 か所の緑道の場所
「名古屋市緑道基本整備基本計画」p26（加工）

図 2 現地調査を行った 9 か所の緑道

表 1　緑道の種類分け

庄内用水緑道	天満緑道	守山すいどう緑道
用水＋緑+第 1 種住居地域	用水＋緑+第 1 種住居地域	公園＋緑＋第1種住居地域
今池すいどう緑道	中央線緑道	山崎川緑道
公園＋緑＋第2種住居地域	緑＋線路＋準工業地域	川＋緑＋第 1 種住居地域
堀川緑道	中井筋緑道	中井用水緑道
緑＋川＋準工業地域	歩道＋緑＋第1種住居地域	緑＋川＋工業地域

3.2.周辺環境が類似の条件の緑道を比較

調査対象である庄内用水緑道と天満緑道を比較していく。どちらの緑道も緑、水はともにある。ただ、違いがある。それを整理した（図 2,3）。

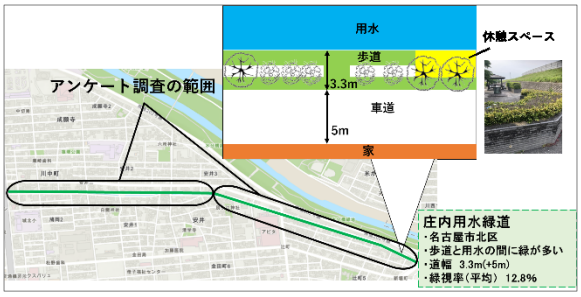


図 2　庄内用水緑道の平面図

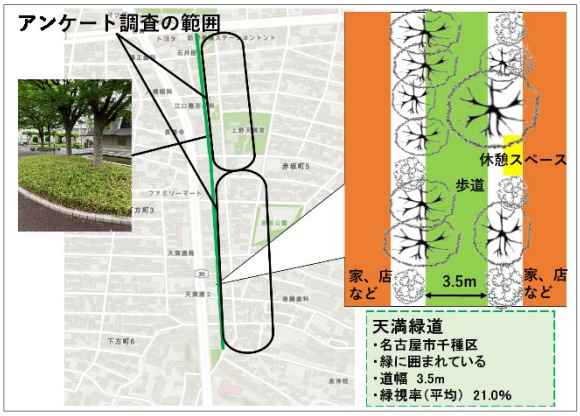


図 3　天満緑道の平面図

3.3.アンケート調査の対象地域

身近にある緑道の調査を行うため、緑道の近くにある住居地（図 2,3）を対象とする。

それぞれの緑道の癒される場面や対象、利用時間について共通していること。また、緑や水の位置が違うことから、それらに違いがあるのではないかと考える。このことから、実態を知るためにアンケート調査を行った。

4.緑道の利用実態

4.1.アンケート調査の概要

それぞれの緑道による癒し効果と緑と水の違いによる効果の違いを知るため、庄内用水緑道と天満緑道の近く（図 2,3）に住む方にアンケートを行った（表 2）。また、「癒しの場として利用しているのか」について確認できる質問を作成した（図 4）。

表 2　アンケート調査の概要

場所	庄内用水緑道	天満緑道
日時	2022/11/15(火)~2022/12/19(月)	
対象者	図 2 の囲った住居地	図 3 の囲った住居地
回答数	200 件中 50 件	
回答率	25%	
調査方法	ポスティング形式（用紙に記載の QR コードから回答）	

図 4　アンケート調査の質問項目

・年齢　・性別　・職業　・緑道の利用頻度［平日と休日］　・誰と緑道を利用するのか　・緑道利用時の満足度　・緑道が地域の魅力を向上させていると思うのか　・緑道は癒される場所か［癒される場面、利用するタイミング、その時間帯、癒しの対象］　・利用目的　・日中の自宅滞在時間［平日と休日］　・コロナウイルスが流行後の利用頻度［増えた場合は理由］　・緑道の改善点

4.2.アンケート回答者の緑道の利用実態

アンケート回答者の属性については図 5~7 のようになった。

利利用するタイミングは庄内用水緑道では退勤、下校の後に利用している方が多かった。天満緑道は出勤、登校の前に利用している方が多かった。（図 8）。

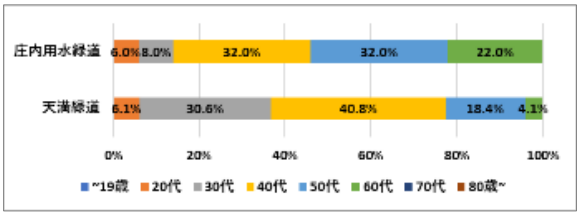


図 5　年齢

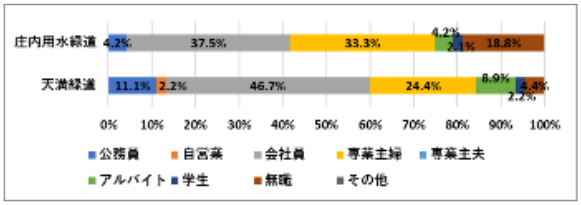


図 6　職業

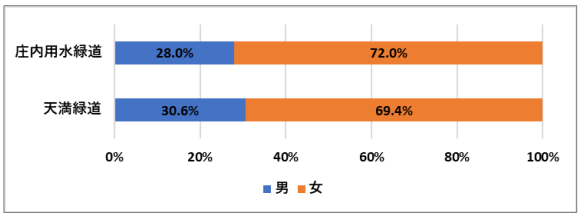


図 7　性別

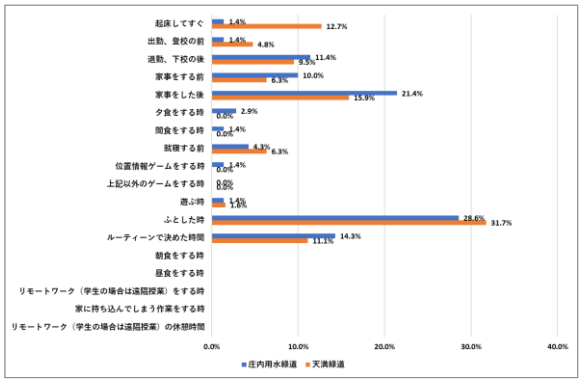


図 8　癒されるタイミング

4.3.アンケート回答者の緑道の利用実態の分析

２つの緑道でアンケート回答者に共通していたのは、緑道で「孤独感・仕事の疲れ・家事の疲れ」を癒すために利用している方が多かったこと（図 9)。違いは、癒される場面であった（図 10)。利用者の属性を知るために年齢、職業、性別で表を作り整理した。

まず年齢について孤独感は、庄内用水緑道では多くの 40,50 代の方が癒されているが天満緑道では仕事の疲れも含めて 30 代の方が多かった。家事の疲れは、庄内用水緑道では 60 代の方が多かったが天満緑道では 40 代の方が多かった（表 3)。

職業については天満緑道を利用している会社員の方が仕事の疲れを癒していることが多かった。また、庄内用水緑道を利用している専業主婦の方が孤独感を癒していることが多いことが分かった（表 4)。

性別についてはどちらの緑道も女性の利用者が多かった。庄内用水緑道では孤独感が癒される女性の方が多く、天満緑道では仕事の疲れが癒されている女性の方が多いことが分かった。(表 5)。

庄内用水緑道では 40~60 代の会社員と専業主婦の女性がベンチで休憩する時、草木や花、生物などの観察をする時が癒される方が多かった（表 6)。

天満緑道では 30,40 代の会社員の女性の方がペットと散歩する時、専業主婦の女性が木々に囲まれている空間にいる時に癒される方が多かった（表 7)。

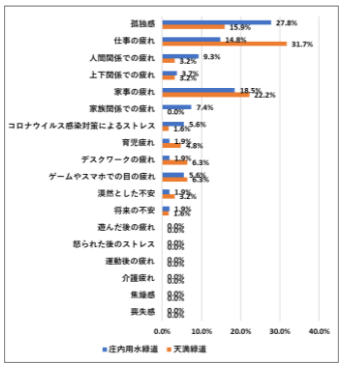


図 9　癒しの対象

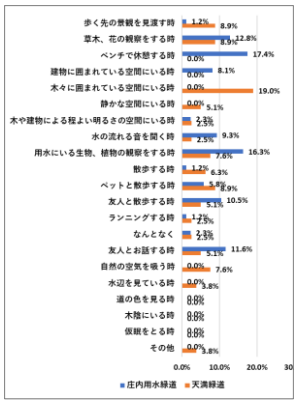


図 10　癒される場面

表 3　癒しの対象［年齢別］

庄内用水緑道（人）				天満緑道（人）		
年齢	孤独感	仕事の疲れ	家事の疲れ	孤独感	仕事の疲れ	家事の疲れ
~19歳	0	0	0	0	0	0
20代	0	0	0	1	1	0
30代	1	1	1	4	12	3
40代	5	3	2	2	5	7
50代	6	3	3	2	1	2
60代	3		5	1	0	2
70代	0	0	0	0	0	0
80歳~	0	0	0	0	0	0

表 4　癒しの対象［職業］

庄内用水緑道（人）				天満緑道（人）		
職業	孤独感	仕事の疲れ	家事の疲れ	孤独感	仕事の疲れ	家事の疲れ
公務員	0	0	0	1	2	0
自営業	0	0	0	0	1	0
会社員	6	5	4	6	12	4
専業主婦	5		7	1	2	8
専業主夫	0	0	0	0	0	0
アルバイト	1	1	0	0	1	0
学生	0	0	0	0	0	0
無職	2	1	0	1		1

表 5　癒しの対象［性別］

庄内用水緑道（人）				天満緑道（人）		
性別	孤独感	仕事の疲れ	家事の疲れ	孤独感	仕事の疲れ	家事の疲れ
男	1	1	0	4	4	0
女	14	6	11	6	15	14

表 6　癒される場面［庄内用水緑道］

庄内用水緑道（人）			
年齢	ベンチで休憩する時	草木、花の観察をする時	用水にいる生物、植物の観察をする
~19歳	0	0	0
20代	0	0	1
30代	1	0	0
40代	5	3	4
50代	3	4	4
60代	6	4	5
70代	0	0	0
80歳~	0	0	0

庄内用水緑道（人）			
職業	ベンチで休憩する時	草木、花の観察をする時	用水にいる生物、植物の観察をする
公務員	0	0	0
自営業	0	0	0
会社員	5	4	5
専業主婦	5	5	5
専業主夫	0	0	0
アルバイト	0	0	0
学生	0	0	0
無職	4	2	3

庄内用水緑道（人）			
性別	ベンチで休憩する時	草木、花の観察をする時	用水にいる生物、植物の観察をする
男	1	1	3
女	14	10	11

表 7　癒される場面［天満緑道］

天満緑道（人）

年齢	木々に囲まれている空間にいる時	歩く先の景観を見渡す時	ペットと散歩する時
~19歳	0	0	0
20代	0	1	2
30代	5	2	4
40代	6	0	1
50代	3	2	0
60代	1	0	0
70代	0	0	0
80歳~	0	0	0

天満緑道（人）

職業	木々に囲まれている空間にいる時	歩く先の景観を見渡す時	ペットと散歩する時
公務員	2	1	0
自営業	1	1	0
会社員	3	1	5
専業主婦	6	0	0
専業主夫	0	0	0
アルバイト	2	0	0
学生	0	1	0
無職	1	1	0

天満緑道（人）

性別	木々に囲まれている空間にいる時	歩く先の景観を見渡す時	ペットと散歩する時
男	3	4	1
女	13	1	6

4.3.アンケート回答者の緑道の評価

2 つの緑道の満足度と地域の魅力はどちらも「満足」、「向上」している方の割合が 5 割を超えるという結果を得られた（図 11,12）。

改善点についてどちらの緑道も「ない」と回答した方が多かったが、庄内用水緑道は安全面について、天満緑道はベンチについての回答もあった。共通していたのは、街路灯など灯りの増加についてだった（図 13）。

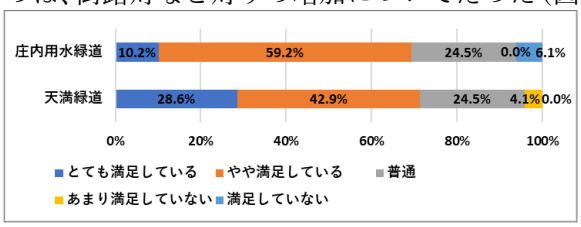


図 11　緑道の満足度

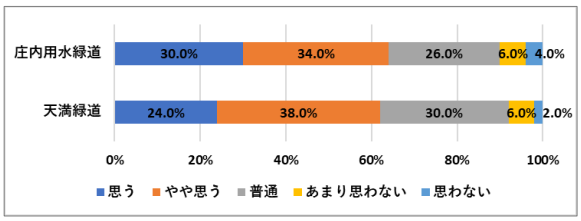


図 12　緑道によって地域の魅力が向上していると思うか

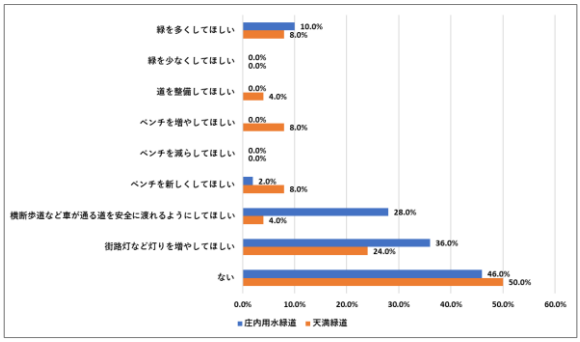


図 13　緑道の改善点

5.考察

5.1.アンケート回答者の評価と癒しの場としての分析

2 つの緑道での利用した時の満足度において、「満足している」「やや満足している」の割合が 5 割以上あった（図 8）。このことから、2 つの緑道は利用者の癒しの場として満足に利用できていると言える。また、緑道があることによって地域の魅力が向上していると思うのかにおいても「思う」「やや思う」の割合も 5 割以上あり、向上していると言えることから、緑道の空間の景観が良いと考えられる。したがって、その地域の住民にとって景観が良く、利用時も癒しの場として満足できる空間であると考えられる。

「孤独感・仕事の疲れ・家事の疲れ」について庄内用水緑道では、40~60 代の会社員と専業主婦の女性の方が多く利用していることが分かった。一方、天満緑道では、30~40 代の会社員と専業主婦の女性の方が多く利用していることが分かった。このことから、天満緑道の利用者の方が若い方が多いこと、どちらも会社員と専業主婦の女性の利用者が多いことが分かった。

庄内用水緑道には学校や仕事の疲れを癒す効果があり、天満緑道には学校や仕事に行くための機動力になる効果があると考えられる。

癒される場面について庄内用水緑道はベンチで休憩する時、天満緑道は木々に囲まれている空間にいる時が多かった。このことから、その 2 つの緑道にある特徴が生かして癒されていることが分かった。

5.2.緑道のこれからの可能性

庄内用水緑道では緑道を利用する際の安全面に不安があるため、看板などで注意喚起を行う。天満緑道は休憩スペースのベンチに不満があるため、修繕を行う。また、どちらの緑道も日が落ちるととても暗くなってしまうため、街路灯などの灯りを増やす必要があると考える。これらを行うことで利用者の増加や癒しの対象者、属性の幅が広がる可能性があると考える。

謝辞

アンケート調査を行うに当たり庄内用水緑道と天満緑道の近辺の住民の方達に関わっていただきました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

参考文献

1）花里 真道,吉田 紘明：「健康の維持・増進を支援する地域環境 ～ウォーカブルストリートの疫学研究と社会実装～」，2022 年度日本建築学会大会（北海道）pp. 21-24，2022 年

2）山田 雄大,岡本 肇,栗並 秀行,澤山 朋成,有賀 隆：「住宅地における緑道整備実態と利用状況に関する調査・研究 -名古屋市緑道整備基本計画の対象路線を事例に-」日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸），pp. 2，2002 年 8 月

2022 年度卒業研究論文概要

自分史を活用した記憶に残る空間の抽出方法に関する研究
～感情と場の関係性に着目して～

EC19040　後藤誠弥

1.　研究の背景と目的

人は生きている中で様々な感情を受けるだろう。その中で、どのような場所や空間が感情を受けた際に記憶として残っているのかを、人々が残した「自分史」の中から読み解き、データ化することによって、よりよい空間づくりについての考察を計ることができるのではないかと考えられる。自分史には、その人の人生の中での印象的なエピソードが書かれているため、様々な人の無意識的な記憶が得られると考えられる。また、アンケート調査やヒアリング調査とは違い、実際に人に聞くのではなく、書物に残されたものから記憶に残る場所を抽出することでよりその人の心情に近いものを読み取ることができると考えられる。また、近年の技術革新により文書データが大事になってくるのではないかと考えられ、自分史を用いたまちづくりに関しての研究は他にはなく、新しい視点から考察ができるため、必要な研究だと考えられる。今回は、自分史の中に書かれている感情をあらわす単語１つ１つから、その感情を生み出した場所や空間、関わっていた人や背景、要因などについて明らかにする。また、その感情は 1 人で受けたものか、又は複数人で受けたものか、春日井市内の特定の場所なども明らかにする。さらにこれを、ライフステージ別及び、プラスの感情かマイナスの感情かの観点からも見ていく。

2.研究の枠組み

2-1.研究の対象

春日井市にある「日本自分史センター」に収録されている自分史を収集する。今回は、表 1 で示したように、令和 3 年 4 月から令和 4 年 3 月までの 1 年間に春日井市内の方が書かれた自分史 12 冊を用いる。これは一つの地域で絞った方が、傾向が見やすいと考えられるためである。また、コロナ禍での考察もできると考えられるためである。

2-2.研究の手順、方法

自分史のテキストマイニングを行う。これはどの単語がどれくらいの頻度で使われているかの分析を行うことである。この作業には KH Coder を用い、統計のデータを可視化する。これで記憶に残る場所などの事柄が多いかがある程度わかるが、文章との結びつきや関連を見るためには前後の文章を読むアナログな作業も必要である。抽出された感情を表す単語の上位 10 単語(プラスの感情 10 個、マイナスの感情 10 個)を取り出し、前後の文章からその感情を生み出した「場所・空間」、「関わっていた人や背景」、その感情を生み出した原因やきっかけをあらわす「要因」の 3 つを主に集計する。また、共感の部分を見るために「1 人での感情か、複数人で受けた感情か」、「ライフステージ」の観点からも見ていき、具体的な場所を見るために「春日井市内の特定の場所」も集計する。

表 1.用いた自分史データ

年月	著者	題名
R3年4月	春日井東部自分史友の会	けやき　67号
R3年6月	春日井市自分史サークルまいしゃの会	まいしゃ　第42号
R3年6月	春日井東部自分史友の会	けやき　68号
R3年11月	小川玲	笹百合
R3年12月	春日井東部自分史友の会	けやき　71号
R3年12月	春日井市自分史サークルまいしゃの会	まいしゃ　第43号
R4年1月	太田　省三	わたしが発見した新世界　上巻
R4年1月	太田　省三	わたしが発見した新世界　下巻
R4年2月	春日井東部自分史友の会	けやき　72号
R4年2月	西村静雄	自分史　わが人生のトレッキング
R4年3月	公益財団法人かすがい市民文化財団	かおりのきおく
R4年3月	かすがいエッセイクラブ	道すがら　22号

2-3.調査するにあたっての定義決め

ライフステージを「幼少期・学生」、「社会人・家庭」、「老後」、の 3 つに分けて見る。感情をあらわす単語の上位 10 単語の結果を表 2、表 3 とし、これを用いる。場所・空間で出てくる「自然環境」は山、森、池などの自然を指す。

表 2.プラスの感情

	語数(個)	割合(%)
楽しい	112	26.9
幸せ	70	16.8
安心	38	9.1
懐かしい	37	8.9
満足	33	7.9
感動	28	6.7
嬉しい	27	6.5
笑い	25	6.0
頑張る	24	5.8
感心	22	5.3
計	416	100

表 3.マイナスの感情

	語数(個)	割合(%)
心配	84	21.7
苦労	53	13.7
怖い	44	11.4
寂しい	44	11.4
泣く	42	10.9
不安	39	10.1
辛い	27	7.0
悲しい	21	5.4
苦しい	17	4.4
恥ずかしい	16	4.1
計	387	100

3.調査結果

抽出された場からプラスの感情・マイナス感情のそれぞれ上位 10 個をグラフにした。11 個目以降はその他に分類する。割合の和はそれぞれ 100%。

3-1.ライフステージ別に見る場　＜幼少期・学生＞

表 4.幼少期・学生データ数

	場所空間	人、背景	要因
プラス	88個	95個	100個
マイナス	95個	75個	105個

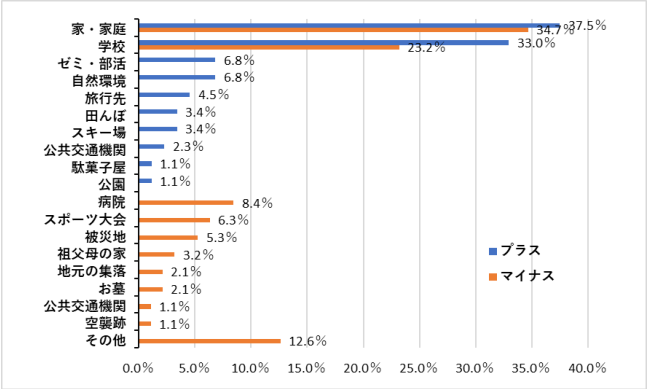


図 1.幼少期・学生＜場所・空間＞

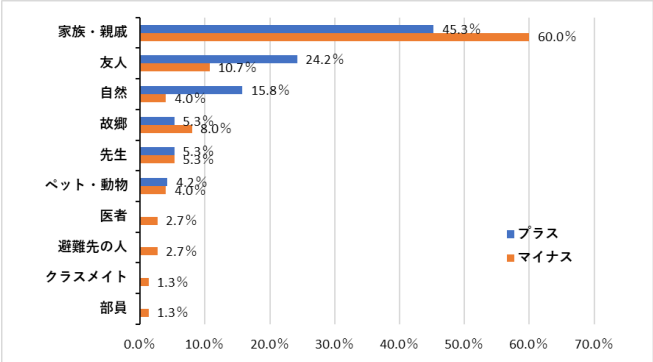


図 2.幼少期・学生＜人、背景＞

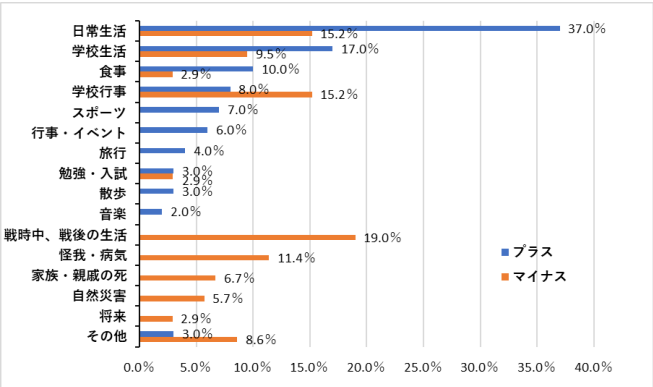


図 3.幼少期・学生＜要因＞

表 5.⊕一人 or 複数人

	データ数	割合(%)
複数人	61	69.3
1人	27	30.7
計	88	100.0

表 6.⊖一人 or 複数人

	データ数	割合(%)
複数人	46	48.4
1人	49	51.6
計	95	100.0

3-2.ライフステージ別に見る場＜社会人・家庭＞

表 7.社会人・家庭データ数

	場所空間	人、背景	要因
プラス	76個	94個	80個
マイナス	102個	87個	115個

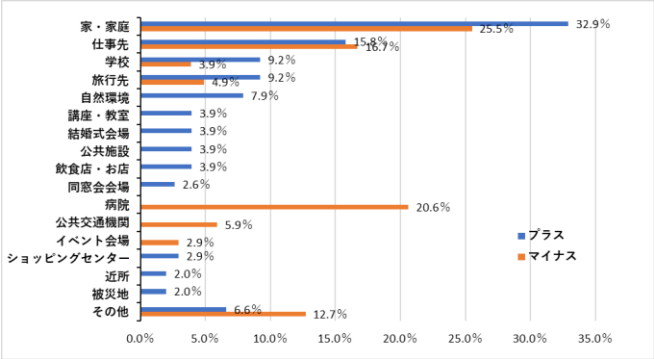


図 4.社会人・家庭＜場所・空間＞

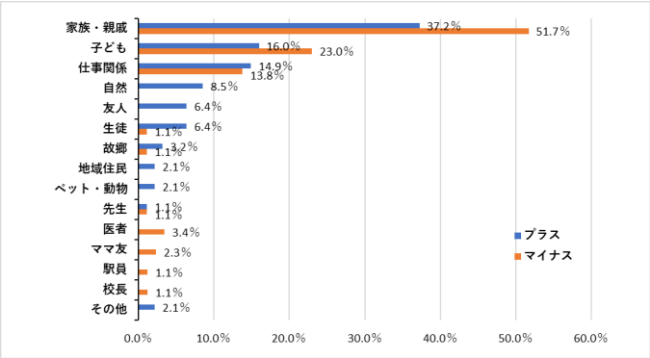


図 5.社会人・家庭＜人、背景＞

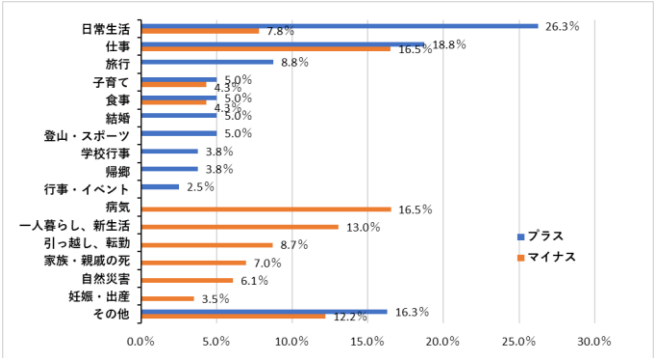


図 6.社会人・家庭＜要因＞

表 8.⊕一人 or 複数人

	データ数	割合(%)
複数人	66	86.8
1人	7	9.2
計	76	100.0

表 9.⊖一人 or 複数人

	データ数	割合(%)
複数人	42	41.2
1人	60	58.8
計	102	100

3-3.ライフステージ別に見る場＜老後＞

表 10.老後データ数

	場所空間	人、背景	要因
プラス	145個	124個	156個
マイナス	114個	82個	159個

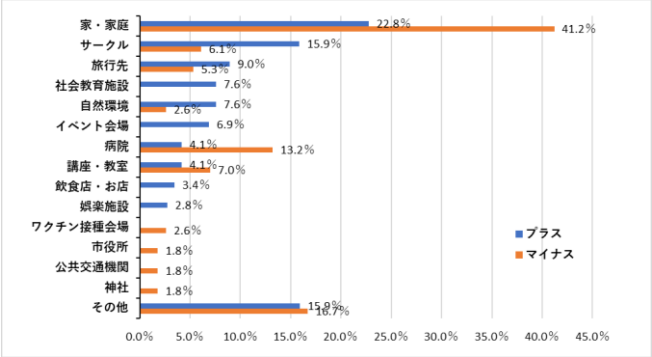


図 7.老後＜場所・空間＞

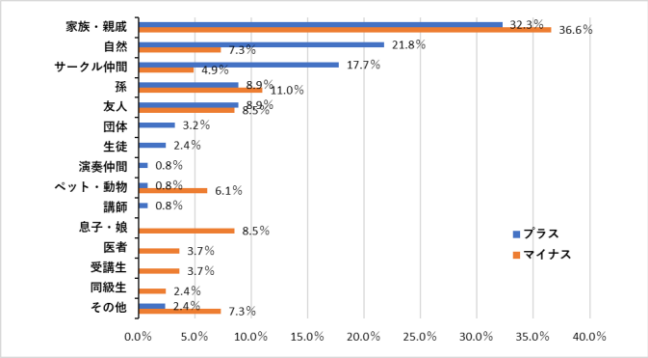


図 8.老後＜人、背景＞

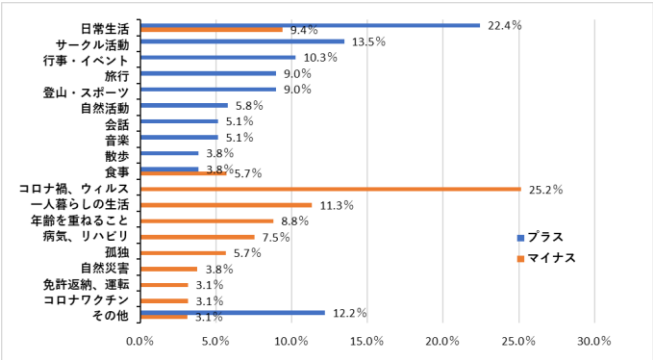


図 9.老後＜要因＞

表 11.⊕一人 or 複数人

	データ数	割合(%)
複数人	103	71.0
1人	42	29.0
計	145	100.0

表 12.⊖一人 or 複数人

	データ数	割合(%)
複数人	42	26.4
1人	117	73.6
計	159	100.0

3-4. 感情を用いた空間の抽出時に出てきた春日井市内の特定の場所とその内容

表 13 より、落合公園や山など自然環境に触れられる空間はプラスの感情としての記憶に残りやすいことが見受けられた。また、小学校で開かれるプロジェクトなど、子供たちと触れ合うこともプラスの感情として記憶に残りやすいという結果になった。マイナスの感情では、高蔵寺ニュータウンが多く記憶に残っており、コロナ禍でイベント等が中止されたことも挙げられていた。

表 13.春日井市内の特定の場所

感情	場所	内容
＋	落合公園	コロナ禍で花見をした
＋	落合公園	自然と歴史ウォークというイベントに参加
＋	落合池	小学生の頃、遠足に行った
＋	藤山台小学校	娘が水泳の代表選手に選ばれた
＋	自然少年の家	自然教室のボランティアに参加
＋	岩成台小学校	どんぐりの植樹祭を行った
＋	グリーンパレス春日井	高校生の時に泊まった
＋	文化フォーラム春日井	自分史サークルで会話するのが楽しい
＋	名古屋徳洲会病院	家族がお見舞いに来てくれた
＋	愛知県医療療育総合センター	周辺の自然を見ながらお散歩
＋	坂下公民館	コロナ禍にコーラスの講座を受けに行った
＋	弥勒山	クラブで登山
＋	押沢山	自然を親しむ交流会に参加
＋	玉川保育園	子どもたちを見て昔を懐かしむ
＋	松山小学校	読み聞かせに行くのが楽しい
－	レディヤン春日井	会議中におなかが苦しくなりトイレに入った
－	高蔵寺ニュータウン	伊勢湾台風での被害経験から高台に家を建てた
－	高蔵寺ニュータウン	下に活断層があるので南海トラフが心配
－	高蔵寺ニュータウン	治安について心配
－	坂下公民館	コロナで歌の講座の発表会が中止になった
－	春日井市民病院	内視鏡検査をして手術

3-5.共起ネットワーク図を用いた空間の関係

今回の調査において、空間的な要素として重要だと考えられる「懐かしい」と「寂しい」における空間の関係図を示す。

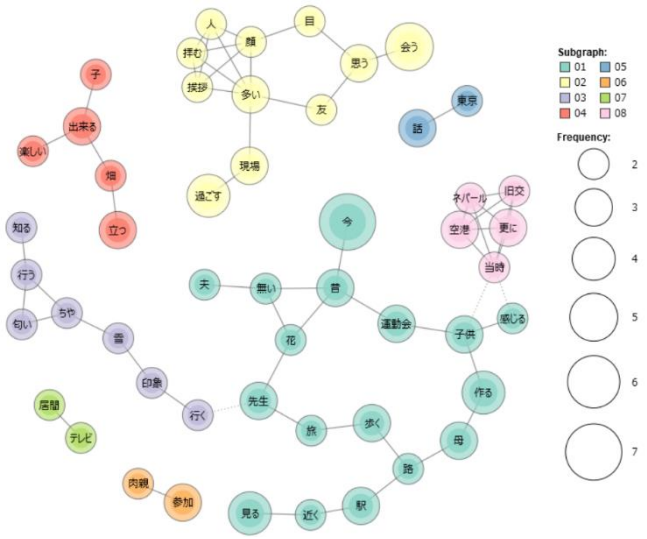


図 10.共起ネットワーク図（懐かしい）

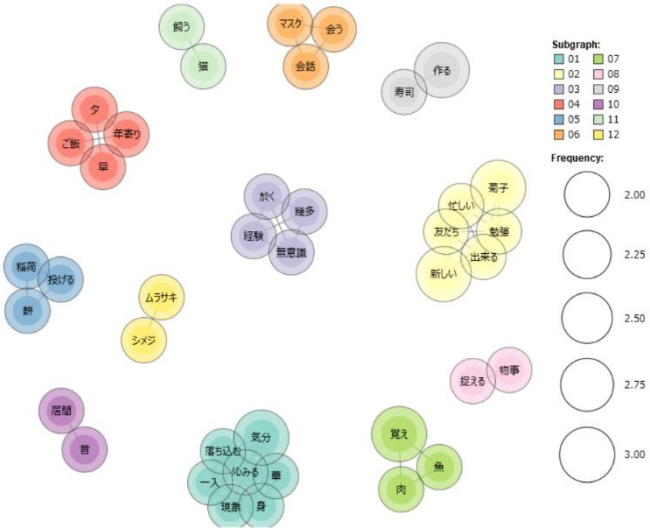


図 11.共起ネットワーク図（寂しい）

図 10、図 11 より、「懐かしい」では、日常の記憶としては、居間で家族とテレビを見ているときの場の記憶や外だと駅や畑、雪などが空間の記憶のパターンとして残りやすいことが分かる。非日常では、家族旅行の際の空港や学校行事である運動会が場の記憶として残りやすいことが分かる。「寂しい」では、コロナ禍でなかなか人と会えず会話ができないことや、昔に家族で過ごした居間を思い出して寂しいと感じる人がいることが分かる。

４．調査結果からみる考察、結論

今回用いた自分史では、12 冊でおよそ 50～60 人の場の記憶を見ることができた。著者の名前や自分史の内容からみる男女比も同じくらいであった。また、自分史の内容から読み取れる著者の年齢については、ほとんどの方がご年配の方と見受けられたため、今回使用した 3 つのライフステージ別での場の記憶を見ることができた。

幼少期・学生の場の記憶では、「家・家庭」、「学校」が多いことが読み取れる。旅行や行事などの非日常的な空間の記憶も多いが、家の中での日常生活、特に家族で食卓を囲んで食事しているときの空間の記憶のパターンが多かった。

社会人・家庭の場の記憶では、やはり家や日常的な記憶は多いものの、「仕事」や「子ども」に関する記憶も多かった。プラスの感情では、家での子どもとの日常生活、学校での子どもの運動会、家族旅行などが記憶のパターンで多かった。マイナスの感情では、引越しや転勤、出産など人生のターニングポイントとなる場の記憶が強く残る傾向にあることが分かる。プラス・マイナス通じて、仕事や子育てが要因として挙げられており、この 2 点は社会人・家庭のライフステージにおいて非常に重要になってくると考えられる。

老後の場の記憶では、プラスの感情の空間としてサークルや旅行先、公民館などの社会教育施設が空間的な記憶に残っていることが分かる。マイナスの感情では、コロナ禍で思うような生活ができないことのほかにも、伝統文芸が高齢化により存続できないこと、ふる里が限界集落になってしまったことなどといった現代の高齢化社会による現状が見受けられた。また、一人暮らしの生活になってしまい孤独を感じている人も多く、身体の老いや病気などにより生活に不安が出てくることも分かった。

全体の結果を見て、「家族―家」という空間が大事であることが読み取れた。近年は区画整理の再開発のため、長年住み続けた家を離れなければならないということも起こっていたり、幼少期・学生の場の記憶で多かった学校も閉校してリニューアルされているという現状から、住環境が長期的な存在として大事であること、現代の日本のまちづくりによって思い出の場所や空間が失われつつあることが考えられる。場の記憶のパターンとして、みんなで食事をしているときの空間が多かったため、記憶の定着には食事が重要なことも感じられた。また、「自然」が関係する空間は、プラスの感情になりやすく、より充実した生活を送ることができるのではないかと考えられる。コロナ禍で人に会うことができないなど、ストレスを抱えている人は非常に多いのではないかと見受けられた。プラスの感情の方がマイナスの感情よりも複数人で感じることが多いという結果が出たので、誰かと一緒に共感するという事は良い記憶として残りやすいことが分かった。サークル活動やツアーなど仲間と一緒に過ごすことがプラスの感情になりやすいという結果から、サークルという空間は孤独感を感じやすい高齢者にとって、いわばサードプレイス的存在になりうるのではないかと考えられる。

今回の研究では、「共感」という部分が非常に大事だと考えられたため、みんなで感情を共有できるような場所や空間だったり、思い出に残るような場所や空間を増やしていくことがまちの発展や良い空間づくり、生活の質の向上につながってくるのではないかと考えられる。自分史を活用したことにより、ライフステージでの場の移り変わりを見ることができた。その中でも当時から何十年も経っているが記憶に残っている「幼少期・学生」時代の記憶は非常に重要だと考えられる。空間として「学校」が多く抽出され、現代では閉校によるリニューアルも多くなっているため、そういった場所の活用の仕方が大事になってくると考えられる。

参考文献

1) かすがい市民文化財団：自分史について、
https://www.kasugai-bunka.jp › jibunshi
(参照 2022-4-20)
2)折り紙ジャパン：感情を表す言葉 145 種類｜日本語の豊かな表現、
https://origamijapan.net/origami/2018/06/01/kidoaira
(参照 2022-11-11)
(謝辞)自分史を貸し出して頂いた、日本自分史センターの方ありがとうございました。

2022 年度卒業研究論文概要

Hisaya-odori Park の使われ方に関する研究
～主に飲食店利用後の動向に着目して～

EC19053　西脇　一哉

1.研究の背景と目的

名古屋市の栄にて最近リニューアルされた久屋大通公園であるが、Park-PFI を利用して公園本来の賑やかさを獲得するため、多くの飲食店が立ち並ぶこととなった。だが、果たしてそれは本当に賑やかさと関係しているのか飲食店だけでなく公園部分を利用している人はどれだけいるのか。

そこで、町の中心部に巨大な公園を作っている象徴的な例として久屋大通公園をターゲットにし、現代においての「公園」としての使われ方はどのようなものなのかを検証する。各ゾーンを長時間周回することにより、利用者がどの時間帯で一番活動しているか、どのゾーンが一番使われているかなどのデータが取れる上に、そこに足取り調査を織り交ぜることにより飲食店を利用した人の動向、公園とカフェの相乗効果や利用実態を明らかにすることができる。賑やかさを重視している久屋大通公園に求められているもの、公園と商業施設の相乗効果を得るにはどうすればよいかなどを公園部分にたたずんでいる人や立ち止まったりしている人が賑やかさに直結しているという方針で考察する。

2.研究の枠組み

2.1 対象地の概要

本研究では、名古屋市中区にある久屋大通公園の ZONE 3 と ZONE 4 を研究対象地とする。公園内では、ZONE 1 の左側の緑の空間をケヤキ広場、右側の空間をシバフ広場という風に名づけられており、緑や景観を楽しんだり、ゆったりできる場所として使われている。ZONE 2 ではカフェや少し価格帯の高い飲食店が軒を連ねている。セントラルブリッジの右側の ZONE3、ZONE4 は公園よりもショップや飲食店が立ち並んでおり、ZONE 2 に比べて比較的手の届きやすい価格帯の店舗が多くなっている。調査対象地としては、主に飲食店の利用者が見込めそうな ZONE3 と ZONE 4 に決定した。

図１　久屋大通公園平面図

2.2 研究方法

本研究では、オフィス街に位置する公園で飲食店を利用する人について滞在者の動向や、どこで休憩しているかなどを観察する「目視調査」に加え、独自の調査として飲食店を利用した人の足取りを追跡し、次にどこへ向かったのかを記録する、「足取り調査」も実施する。久屋大通公園に来ている理由を明らかにすることや、仮説への検証を行う。目視調査では、9 月中旬から１２月下旬、週に１回平日のみという条件で調査を行った。社会人の動向を調査したいため、調査時間は 8:00~18:00 の間に設定した。そして、公園内は非常に多くの利用者がいるため手動でのカウントは信憑性に欠け、効率も悪いことから、１時間に１回各ゾーンの写真を撮り、そこに写った人をカウントする手法を採用した。そこに写った人の位置、行動、属性、性別を記録する。

2.2 研究方法

本研究では、オフィス街に位置する公園で飲食店を利用する人について滞在者の動向や、どこで休憩しているかなどを観察する「目視調査」に加え、独自の調査として飲食店を利用した人の足取りを追跡し、次にどこへ向かったのかを記録する、「足取り調査」も実施する。久屋大通公園に来ている理由を明らかにすることや、仮説への検証を行う。目視調査では、9 月中旬から１２月下旬、週に１回平日のみという条件で調査を行った。社会人の動向を調査したいため、調査時間は 8:00~18:00 の間に設定した。そして、公園内は非常に多くの利用者がいるため手動でのカウントは信憑性に欠け、効率も悪いことから、１時間に１回各ゾーンの写真を撮り、そこに写った人をカウントする手法を採用した。そこに写った人の行動、属性、性別を記録する。

3. 久屋大通公園の各ゾーンでの利用実態及び調査結果

3.1 日にち、時間で見る滞在者数

表１はコロナ新規陽性者、気温、天気の情報を入れており、横軸では１時間ごとの各滞在者の数を表している。この表から、９月の気温が高い日などは少し涼しくなる夜間の利用者が非常に多くみられ、気温が非常に高い昼の利用者は極端に少ないことがわかる。逆に、11 月下旬からは平均気温が一気に下がってきていることが分かり、これまでとは逆のパターンで気温が暖かい昼に利用者が多く見られ、気温が急激に下がる夜には利用者がほとんどいない状況となった。加えて、滞在者が多く利用しているのは主にゾーン４であり、各時間帯においてもゾーン３の利用者数がゾーン４の利用者数を上回るということは少なかった。商業施設が多いゾーン４ではゾーン３よりも利用者が平均的に多いということが明らかになった。さらに、全体的な利用者数も９月から 10 月中旬までが多いという結果になっており、公園を利用する人にとってひとつ重要な要素として気温というパーツが入ることとなった。

実施日	コロナ新規陽性者(人)	気温(度)			天気	全体人数(人)		8:00(人)		9:00(人)		10:00(人)		11:00(人)		12:00(人)		13:00(人)		14:00(人)		15:00(人)		16:00(人)		17:00(人)		18:00(人)	
		最高	最低	平均		ゾーン3	ゾーン4	ゾーン3	ゾーン4	ゾーン3	ゾーン4	ゾーン3	ゾーン4	ゾーン3	ゾーン4	ゾーン3	ゾーン4	ゾーン3	ゾーン4	ゾーン3	ゾーン4	ゾーン3	ゾーン4	ゾーン3	ゾーン4	ゾーン3	ゾーン4	ゾーン3	ゾーン4
9月16日	1462	31.5	24.1	27.8	曇り	91	167	2	2	2	3	5	5	3	6	5	7	8	6	9	11	13	18	10	32	16	35	18	42
9月22日	1476	23.3	20.4	21.9	雨のち曇り	42	51	0	0	0	0	1	2	2	2	4	3	3	3	4	4	5	5	7	7	8	10	8	15
9月29日	723	26.6	20.4	23.5	曇り	88	153	7	1	5	3	4	3	6	5	5	5	8	6	7	7	9	17	12	26	15	38	10	42
10月5日	766	25.7	21	23.4	曇り	55	102	1	2	0	1	3	2	3	4	4	3	4	2	5	5	7	9	9	18	8	23	11	33
10月12日	907	25	15.7	20.4	晴れのち曇り	78	124	2	0	2	0	3	1	4	3	6	7	6	6	9	9	8	14	11	19	13	27	14	38
10月19日	618	22.7	11.4	17.1	晴れ	84	111	1	0	2	0	3	0	4	1	15	8	17	28	14	16	10	13	5	16	6	17	7	12
10月24日	179	22.5	14.6	18.6	晴れ	95	131	1	1	1	1	3	2	10	14	17	18	14	28	11	21	14	15	12	8	5	6	7	17
11月1日	1263	16.8	15.3	16.1	雨	23	27	0	0	0	0	0	0	1	1	5	5	6	6	2	3	3	4	2	3	3	2	1	3
11月9日	1514	20	7.7	13.9	晴れ	76	91	2	0	2	0	2	4	6	9	15	17	14	21	12	14	8	8	6	5	5	7	4	6
11月17日	1728	16.7	7.5	12.1	曇りのち晴れ	69	73	2	1	2	2	3	3	5	11	18	15	15	13	6	9	6	9	7	5	2	2	3	3
11月24日	804	20.1	11.2	15.7	晴れのち曇り	77	92	3	1	2	1	4	3	7	12	18	16	15	18	7	14	5	11	8	6	4	5	4	5
12月1日	1976	13.2	8	10.6	晴れのち曇り	58	75	0	0	1	2	3	2	6	9	14	17	12	15	4	8	5	7	7	6	3	5	3	4
12月7日	2781	11.9	4	8.0	晴れのち曇り	69	104	1	0	0	2	4	4	7	11	13	21	14	19	10	18	8	10	6	9	4	6	2	4
12月14日	3598	9.7	7.5	8.6	晴れ	47	80	0	0	1	1	0	2	8	11	12	17	11	19	7	11	4	7	3	5	1	5	0	2
12月20日	4034	7.5	-0.1	3.7	曇り	51	92	0	0	0	0	4	5	5	6	11	18	9	20	13	17	5	10	2	7	2	5	0	4
合計人数(人)						1003	1473	22	8	20	16	42	38	77	105	162	177	156	210	120	167	110	157	107	172	95	193	92	230
						2476		30		36		80		182		339		366		287		267		279		288		322	

表１　各時間帯における利用者数

3.2 コロナ感染者数から見た前年度利用者との比較

表２では、飯田和也(2022)の論文を一部抜粋させてもらい、今年度と昨年度の全体の滞在者数の比較をした。今年度のコロナウイルス新規陽性者数は昨年度と比べ約 6.8 倍にもなっている。しかし、前年度と比べても公園の利用者の数はそれほど大きな変化は見られない。賑やかさという観点から見れば、前年度の飯田和也が行ったときの研究結果よりも、コロナウイルス新規陽性者数がたくさんいる中でにぎわっているということが見て取れる。このことから今年度は、コロナウイルスに対する市民への認知のされかたが緩和されたと言い切ってしまってもよいだろう。

2021年	コロナ	ゾーン3	ゾーン4
9月	371	63	87
10月	16	107	133
11月	8	84	115
12月	7	47	98

2022年	コロナ	ゾーン3	ゾーン4
9月	1220	74	123
10月	618	78	117
11月	1327	61	71
12月	3097	56	88

表２　今年度と前年度の滞在者数比較表

3.3 各ゾーンごとの利用者の行動

表 3 に各ゾーンで観測できた利用者の行動をまとめた。表を見ると、公園内で数多く見られた行動に「休憩」と「スマートフォン」、が挙げられる。「休憩」に関してはゾーン 3 では 25.5%、ゾーン 4 では 25.4%を占める割合となり、ケヤキ広場やシバフ広場であらずとも、休憩する人は一定数いることが確認できた。さらに、「スマートフォン」の割合もゾーン 3 で 23.4%、ゾーン 4 で 23.0%と「休憩」に届かずとも十分な占有率となった。ここから考えられる要素としては、電車の時間を調べている、次にいくお店の情報を調べている、単なる暇つぶしなどが挙げられる結果となった。

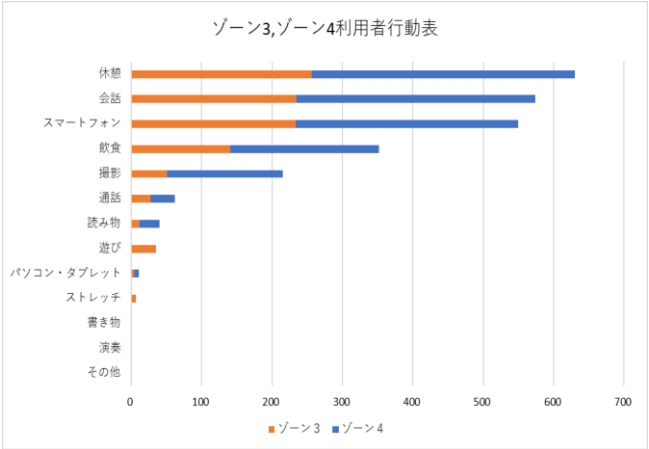


表 3 各ゾーンごとの利用者の行動

3.4 飲食店利用後の利用者の足取り調査

本研究の独自の取り組みとして、足取り調査を実施した。表 3 が現時点での足取り調査の結果をまとめたものである。9 月から 12 月にかけて合計 30 組もの足取りを追跡してきた。表 3 の結果から分かる通り、飲食店を利用した人がそのままケヤキ広場やシバフ広場で休憩するケースは稀であり、大多数の人たちはそのままオアシス２１へ向かったり、オフィス街へ行ったり、地下鉄で移動する人が大半を占めていたのである。
この結果からは、久屋大通公園には飲食店だけを目的にして来た人の割合が多いということが分かった。
加えて、30 組のうち 3 組だけ確認されたケヤキ広場のほうへ向かうパターンでは、全てランチタイムから確認されたケースであり、夜にそのままケヤキ広場のほうへ向かう人たちは確認されなかった。しかし、飲食店を利用した後でもケヤキ広場やシバフ広場などで緑や景観を楽しむ人も見られた。

3.5 飲食店利用後の利用者の動向

本研究では、飲食店を利用した人が最終的にどの方面へ向かうのかに加え、途中でどこに立ち寄ったか、どのような行動をしたのかも記録した。図 5 の赤い線が太ければ太いほど多く使われた道ということになっている。総勢 30 組のなかで一番通過された道は、ゾーン 4 の水辺周辺のベンチの横の道であった。考えられるポイントとしては、飲食店に行こうとするとほぼこの道を通らなければいけないことが挙げられる。最も通過された道としては、オフィス街へ続く道、地下鉄へ続く道にもなっている、もともと飲食店が多く建ち並んでいることから、必然的に多くの人が利用したのではないかと推測できる。そして、最も多く寄り道、足を止めた場所はゾーン 4 の水辺の近くのベンチであった。このベンチは、カフェなどでテイクアウトしたものを食べる、飲む、ご飯を食べたあとで一息つく場所、友達と談笑する空間、水辺を眺めて楽しむなど、ベンチがあることによって様々なシチュエーションでベンチを使う人が多く見られ、飲食店やショップとの相性が抜群であると予想できる。

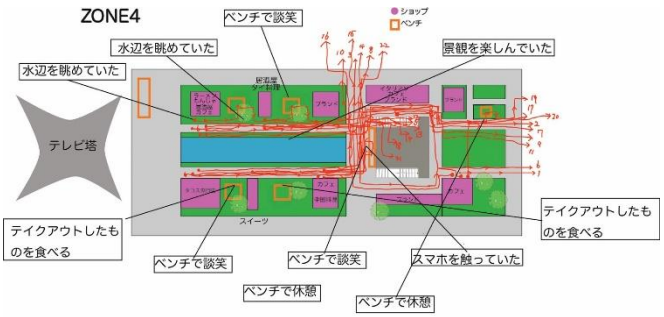


図２　ゾーン４足取り調査結果

図 3 は、ゾーン 3 での利用者の足取りをマップに落とし込んだものだ。赤い線が太いほどその道が多く利用されているということになる。
ゾーン 3 のパターンでは、この飲食店が多く使われているというものがなく、比較的利用者がばらける形となった。ここでの最も多く利用された道は、オアシス 21 方面へ向かう道とセントラルブリッジを経由した道であった。

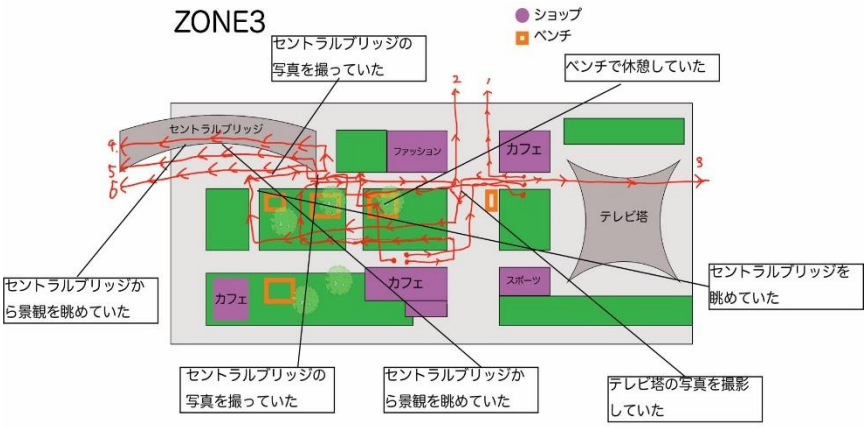


図 3 ゾーン 3 足取り調査結果

特に、セントラルブリッジでは夜間の公園利用者が使うパターンが多く見られ、セントラルブリッジの上で夜景を楽しんだり、ライトアップされたセントラルブリッジの写真を撮影する人も見られた。
さらに、テレビ塔の写真も撮影している人も確認されたため、夜間での利用者は夜景も楽しんでいる傾向にある。その中で、そのまま公園から出るか、夜景を楽しむパターンが主流であったが、昼間でも敷地内のベンチや座れるスペースにたたずむ人や滞在する人が確認されたことから、公園を緑や景観を楽しむ目的として利用している人の割合が多いという結果となった。公園利用者の追跡過程で、ふと立ち止まったり、周りを見渡すような所作が多くの利用者で見られた。これは、公園自体の景観や風景を楽しんでいるということになる。特に夜は、セントラルブリッジで立ち止まる人がいたり、公園内でライトアップされたセントラルブリッジを眺める人もいたりと、公園内で景観を楽しむ人が非常に多かった結果となった。

4 結論

オフィス街に位置する久屋大通公園では、飲食店メインで来る人が大半を占めているということがわかった。しかし、少なからず飲食店を利用した後の動向に関しては、緑を楽しんだりするためにケヤキ広場にいったり、水辺の近くなどでゆったりしている様子が見られることから、景観や心の安らぎもセットで利用する人も存在するのだと分かった。さらに、今日での市民たちのコロナウイルスへの認識もかなり緩和されたことがわかり、久屋大通公園では賑わいを見せていた。今回の研究のテーマである「賑わい」というキーワードも、公園利用者がふと立ち止まったり、写真を撮影したり、ベンチでゆったりしていたりという行動内容から十分に満たされていると考える。オフィス街に位置する公園ということで、飲食店と景観を楽しむ公園としての相乗効果はある程度発揮されているが、12 時頃や 13 時頃などの飲食店でのピークを迎えたときはベンチなどに座れない人もいたことから、座れる場所を増やすなどの対策をすればさらに、飲食店と景観を調和した良い空間になっていくのではないかと考える。

参考文献

名古屋市ホームページ　市内の新型コロナウイルスの発生状況　2022 年 12 月 26 日閲覧
https://www.city.nagoya.jp/kenkofukushi/page/0000157958.html

飯田和也
オフィス街に位置する公園でのんびり過ごす滞在者の動向に関する研究~'Hisaya-odori Park'を対象地として~
中部大学論文集　2022 年 2 月

2022 年度卒業研究論文概要

土地区画整理完了後の農地保全・減少の空間的条件に関する研究
～名古屋市中川区を対象として～

EC19075　山口翔大

1.　研究の背景と目的

以前まで都市では農地がいらないという考え方がされていた。都市農地だった場所が開発され、住宅や商業施設、工場など様々な用途に利用されてきたことで、都市農地は激減した。そのような中、一方では都市農地の必要性も叫ばれ都市農地を保全する動きが高まり、1992 年に生産緑地法が改正され、30 年間の営農義務が課される代わりに、固定資産税の免税措置が図られることとなった。また 2015 年には、都市部の農地は宅地化すべきものという考え方が都市にあるべきものという考え方に変わり、都市農業振興基本法が成立したことで、さらに都市農地を保全・活用する動きにシフトした。しかしそれでも都市農地は減少傾向にある。農地は緑の空間としてだけではなく、防災時の避難地、ヒートアイランド現象の緩和、生物多様の維持の場、人と人をつなぐ場等、多面的な役割を担うポテンシャルを持っている。そのため都市農地の計画的な維持・活用は都市計画においても重要な課題である。そこで本研究では、長期的に都市農地として存続している農地や農地として活用されなくなった場所はどのような環境下にあるのか調査することで、農地の確保しやすい空間的条件を見つけることを目的とする。

2.　研究の枠組み

2.1 研究方法

名古屋市における農地の実態を把握した後、名古屋市のホームページから緑被地データを取得し Arc GIS Pro（以下「GIS」）を用いて農地の面積、空間的条件を調査する。より詳細な保全しやすい空間的条件を見つけることができるため、用途地域を分類ごとに分けたデータにする。1992 年に生産緑地法が改正されたことで、一斉に生産緑地の指定を受けたため 1992 年以前に土地区画整理事業（以下「区画整理」）が完了した地域を対象とし、名古屋市土地区画整理区域図を参考に GIS にフィーチャを作成して表示する。次に区画整理完了後の用途地域別の農地の残存・減少率調査する。最後に空間的条件である農地の種類、農地の面積、日照条件、接道面数について調査する。

2.2 対象地の概要と選定理由

中川区は面積が 32km^2 で人口が 218,474 人の愛知県名古屋市の西部に位置する行政区である。愛知県名古屋市の行政区の中で最も農地が多い区が中川区であり、さらに農地の減少率も最も多い区が中川区である。また用途地域ごとに分けることで農地環境に差ができるため、中川区の中でも多くの割合を占める第一種低層住居専用地域（以下「一低」）と第一種住居地域（以下「一住」）、準工業地域（以下「準工」）を本研究の研究対象地とする。また名古屋市は区画整理が 7 割終わっており、区画整理は農地が影響を大きく受けるため、対象とした用途地域の中でも区画整理が完了している場所を本研究の対象とする。

3.　用途地域ごとにおける農地の減少率

3.1 中川区の 1995 年と 2020 年の農地状況

GIS に中川区の農地データを反映し、1995 年から 2020 年にかけてどれほどの農地が減少しているのか調査した。1995 年から 2020 年の間で対象地域全体での農地面積減少率は 41%である。用途地域別では一低の面積は 82%減少しており、また一住の面積は 73%減少、準工は 67%減少していることがわかった。用途地域別で見ると一低が建物の規制が厳しいため、周辺環境は一低の農地が一番残りやすい環境であるはずが、農地面積は準工が一番多く残っており、一低が一番多く消失していることがわかった。

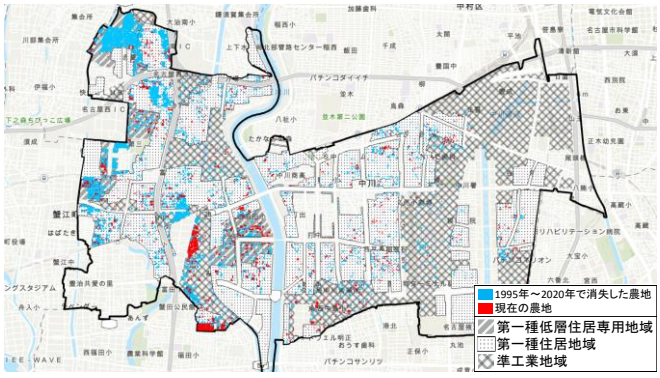


図 1　1995 年と 2020 年の研究対象地域の農地分布

3.2 土地区画整理完了後の 1995 年と 2020 年の農地

GIS に区画整理が完了している場所を表示し、区画整理完了後における農地の減少率を調査した。1995 年から 2020 年の間で区画整理完了後の全体農地面積が 69%減少している。用途地域別では一低の面積は 63%減少しており、また一住の面積は 70%減少、準工は 75%減少していることがわかった。区画整理完了後での農地面積は区画整理前後と異なり、一低が一番多く残っており、準工が一番消失していることがわかった。

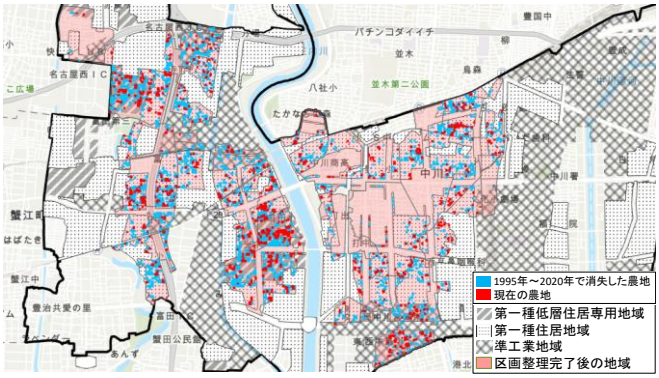


図 3　1995 年と 2020 年の区画整理完了後の農地

表 1　土地区画整理後の農地面積

	農地面積(m²)	減少割合
1995年 準工	141787	75%
2020年 準工	35889	
1995年 一住	770498	70%
2020年 一住	229968	
1995年 一低	219807	63%
2020年 一低	81058	

4.　残存農地と消失農地の特徴と空間状況

4.1 残存農地と消失農地の特徴

4.1.1 農地の種類

農地を種類ごとに分けると畑、田んぼ、果樹園、その他の 4 種類に分けることができる。本研究で対象とした、区画整理完了後の一低と一住、準工の農地数は一住が多く、一低と準工は同等量あることがわかった。また種類別で確認すると、どの用途地域でも畑が最も多い割合で占めていることがわかった。また一番多い割合を占めている畑は、用途地域の中で一低の消失割合が一番少ないことがわかった。準工の畑と田んぼは消失割合が一番多く残りにくいことがわかった。農地を種類別から見た場合でも一低が残りやすく、準工が消失しやすいことがわかった。

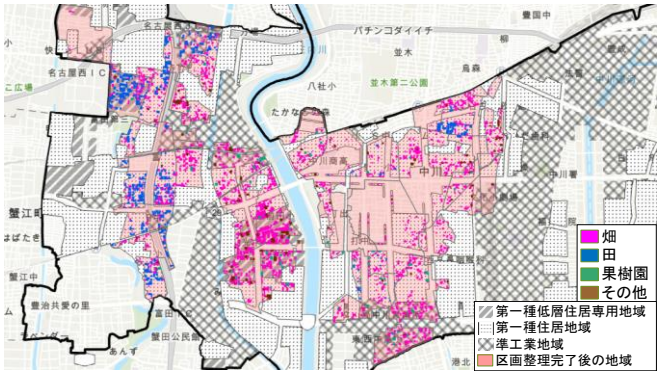


図 4　1995 年種類別農地

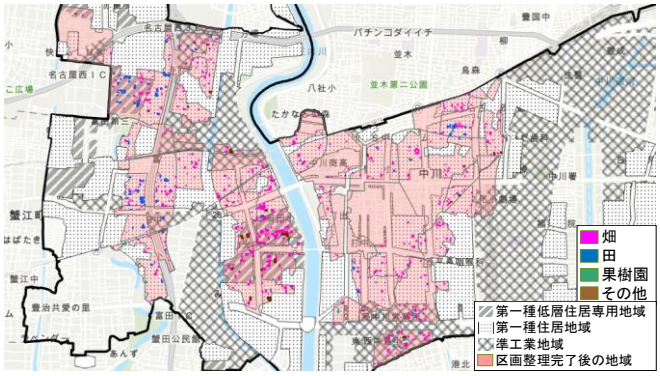


図 5　2020 年種類別農地

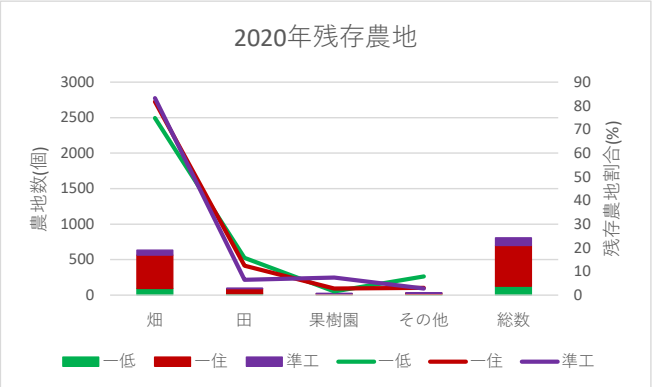


図 6　種類別残存農地

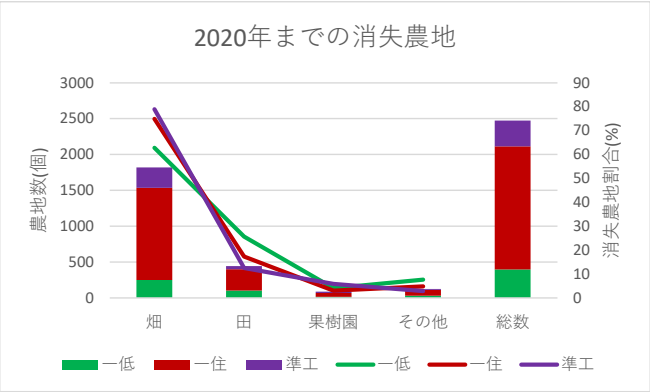


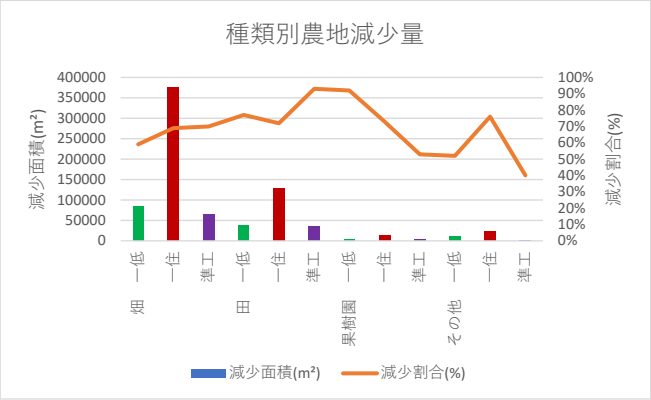
図 7　種類別消失農地

4.1.2 消失農地の用途地域別農地面積

対象とした用途地域の畑の農地面積の消失割合が 60%~70%減少していることがわかった。田んぼは

71~93%と畑よりも農地面積が消失していることがわかった。

図 8　種類別農地減少量



4.1.3 残存農地と消失農地の面積別農地数

GIS で農地のフィーチャを色分けし、農地を大きさごとに分けて調査する。残存農地で一低は、他の地域よりも 300m² 以下の農地の割合が少なく、準工が一番多くなっている。また、500m² 以上の農地の残存割合は一低が一番多く、準工が一番少なくなっている。これより一低は大きい農地が残りやすく、準工は小さい農地が残りやすいことがわかった。消失農地割合は一低の 500m² 以上の農地が他の地域より高いことがわかった。他の消失割合は特に差がなく、等しく減っている。

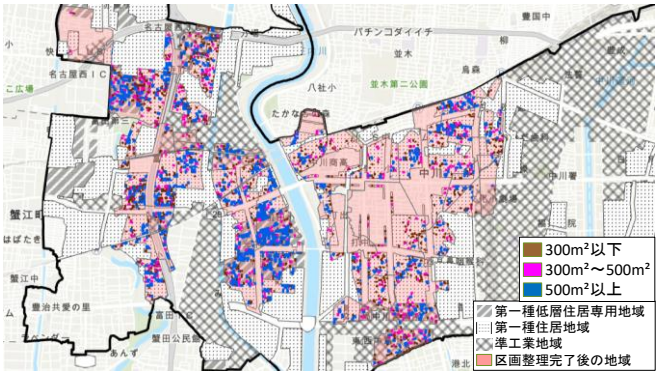


図 9　1995 年の面積別農地

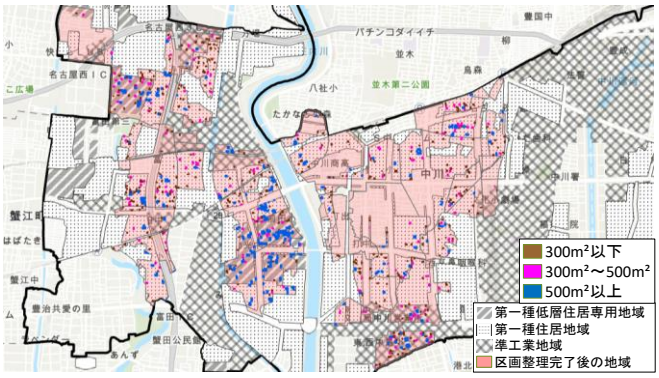


図 10　2020 年の面積別農地

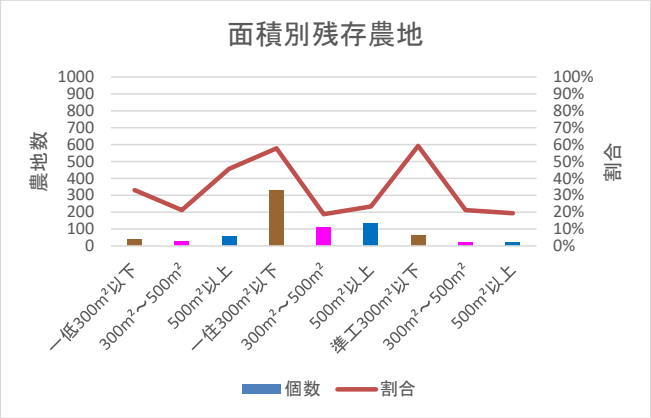


図 11　300m²で区別した残存農地

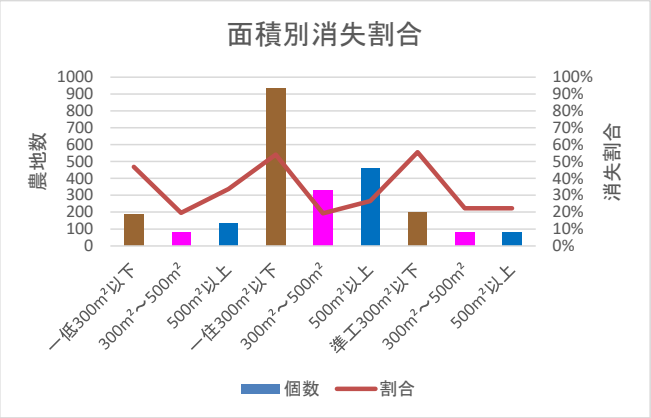


図 12　300m²で区別した消失農地

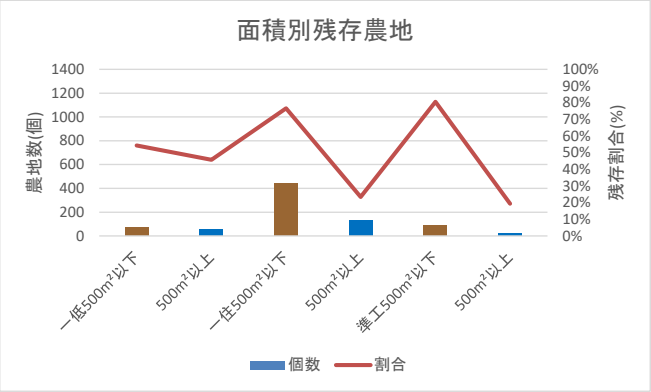


図 13　500m²で区別した残存農地

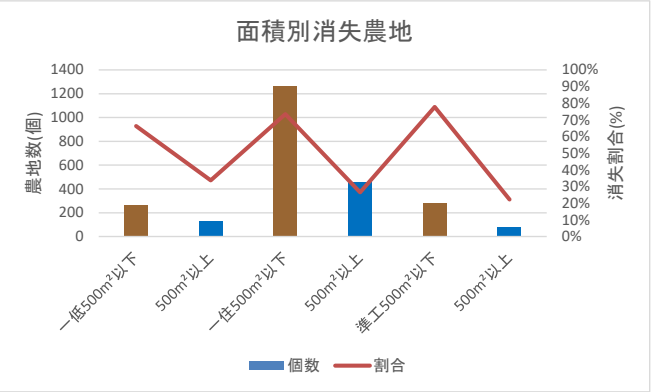


図 14　500m²で区別した消失農地

生産緑地の指定を受けることができる面積が 1992

年に生産緑地法が改正され 500m²であったものが、2017 年に生産緑地法が改正され 300m²に変わったため、この 2 つを基準とする。

4.2 残存農地と消失農地の環境状況

4.2.1 残存農地の日照条件

中川区の中で農地の南側に 12m 以上の建物、3 階建てより大きな建物が位置する場所を調査した。調査した結果、南側に建つ 3 階建て以上の建物は 27 件あることがわかった。しかし農地を全て覆い隠す建物が無いため、残存農地は周辺環境による日照への影響が少ないことがわかった。

4.2.2 残存農地と消失農地の接道面数

用途地域ごとにおける 1995 年と 2020 年の農地の接道面数を調査した。用途地域ごとに特徴があった。接道面数が無い農地は農地数が少なく、グラフも横ばいである。接道面数が 1 面の農地は、準工と一住では割合が増加し、一低では減少していることがわかった。接道面数が 2 面の農地は、一低で割合が増加し、準工と一住はわずかに減少している。接道面数が 3 面の農地は、用途地域に関係なく減少していることがわかった。

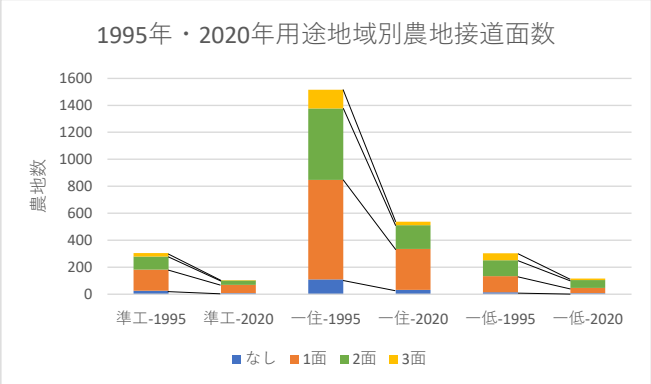


図 15　用途地域別接道面数

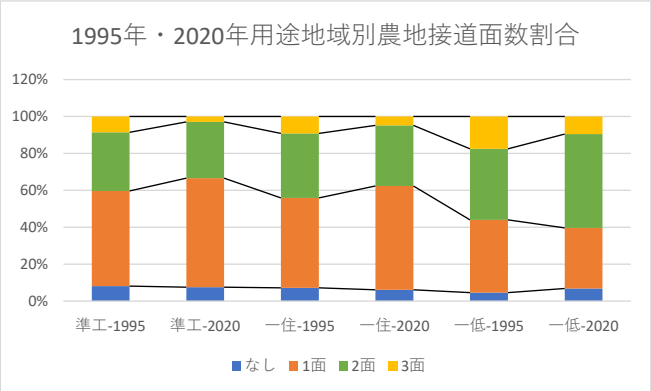


図 16　接道面数割合

5.　まとめ

5.1 考察

中川区の用途地域の中で農地を保全しやすい環境が整っているのは一低だと考えられる。用途地域ごとの農地減少割合が最も小さいためである。また一低内で農地が保全しやすい農地の種類は畑だと考えられる。一低の中でも畑は減少面積と消失農地数が最も少ないためである。次に接道面数、1 面と 2 面の割合が大きいが 2 面は 1995 年より 2020 年の割合が大きいため、接道面数が 2 面の農地が良いと考えられる。準工や一住より建物の規制が厳しいので、一低の空間的条件は農業をする上で良好であると考えられる。

5.2 結論

本研究では、中川区の区画整理完了後の用途地域ごとにおける農地の保全・減少しやすい空間的条件を解明した。規制が厳しい一低が一番農地の空間として良いことがわかった。また一低は 500m² 以上の農地、一住と準工は 300m² 以下の農地と用途地域ごとに存続しやすい農地の大きさがある。日照条件は研究対象にした現在の地域では大きく影響を与えていない。接道面数の場合、一低が 2 面、一住と準工は 1 面が環境として良い。これらのように農地の保全しやすい空間的条件は用途地域ごとで異なることが明らかになった。今回は農地の種類、農地面積、日照条件、接道面数の観点から農地保全・減少の空間的条件に関する研究を進めたが、農地の密集度や区画単位での農地の状況、接道幅員など他の条件でも今後調べて行く必要がある。

参考文献

1)名古屋市土地区画整理区域図（参照 2022-12-05）
https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/gml/datalist/KsjTmplt-A29.html
2)緑被地 GIS データ（参照 2022-08-05）
https://www.city.nagoya.jp/ryokuseidoboku/page/0000145477.html
3)大島　悠平，都市外縁部おける都市農地の消失実態とその後の空間変容に関する研究～，名古屋市中川区を対象として～，2019 年
4)小松　萌，有賀　隆，区画規模と接道街路の幅員及び接道面数を指標とした都市農地の転用実態の解明－世田谷区烏山地域を対象として－，日本建築学会計画系論文集，第 86 巻，第 781 号，903-912，2021 年 3 月